

火野葦平 岩下俊作 劉寒吉集

北九州市立文学館文庫①

目 次

糞尿譚

無法松の一生
(富島松五郎伝)

翁(おきな)

阿蘇外輪山

劉	劉	火	野
		岩	下
寒	寒	俊	葦
吉	吉	作	平

糞
尿
譚

火
野
葦
平

どこかでは既に雨が降っているのか、白く光つて見あげるようむくむくともりあがつた入道雲の方向で、かすかな遠雷のとどろきがして居る。斜面を下りながら、彦太郎は、麦藁帽子の縁に手をかけて空を見あげ、一雨来るかも知れんと思い、灼けるように陽炎をあげている周囲を見わたすと、心なしか、さつと、一陣の冷たい風が来て西瓜畑の葉を鳴らした。赭土の中にころがつた大小さまざまの西瓜は埃にまみれて禿げたような青い色を晒している。下りながら、両手で輪をつくり、口にあてて、おうい、と叫ぶと、小さく下に見える池の中央に入つて、真裸で両手を水中につつこんでいた男が、顔をあげた。彦太郎だと知ると、下の方で背を伸ばし、伸びをして腰を叩き、こちらに笑いかけたのが遠目にもわかつた。土埃をたてて斜面を駆け下ると、惰力で危うく池の中に飛びこみそうになつたが、岸にある無花果の樹によくつかまつた。顔見合させ大声立てて笑つた。卯平さん、あんた、なにしとるか、と彦太郎はもう草の上に坐りこんで腰から鉈豆煙管なたまめがせるを取り出し、雁首にきざみをつめながら訊いた。

びしょ濡れになつた上に額から汗が流れおちて眼に入るのを、卯平は泥だらけの手で拭くわけに行かず、腕でするりとなでて、食用蛙を捕まえてやろうと思つているのだが、なかなか見つかるので、仕方がないから池を干そうと思つて泥吐口どろはきを抜きよつたところだと云つた。食用蛙が居るのか、と彦太郎はびっくりした顔で訊きかえした。

どうも四五日前から妙な声で鳴く奴がある、確かに食用蛙に違いないと思つて探し廻つたがさっぱりわからんのだ、池の底に隠れているに違いないと思つて搔き廻しても出て来ん、がまの穂を餌にして釣りかかつてみたが食いつかん、夜中になると嫌な声を出して鳴きやがる、があおん、があおん、というような赤子のような声で女房はあんな具合だし、瘤にさわってさっぱり寝つかれん、仕方がないから、こんな小さな池だし、干してやれと思つて、先刻泥吐口を抜こうと思つて池の中に入つたんだが、口が赭土を咬えこんでいるのか、なかなか栓が動かんので骨折つとつたところだ、どうしても捕えにや腹が癒えん、と話しながら、卯平はまた両手を赤く濁つた水の中につつこみ、息を吸いこんで顔をしかめたと見る間に、水煙をあげて池の中に沈んでしまつた。しばらくぶくぶくと泡が立つてゐるのを彦太郎はじつと見つめながら、卯平がなかなか上つて来ないので少し不安になりはじめたが、すると、今まで騒いでいた水面が、波紋をおさめじつと動かなくなつた。彦太郎は急に胸がどきどきしだし、何かに引っかかるつて上れなくなつたと思い、入つて助ける気になつてシャツを脱いだ。股引のバンドに手をかけた時、突然池の中でがぼうという大きな音がし、ごうという音といつしょに吸いつけられる勢で水が布を裂くように鳴る音が聞え、水面が渦巻きだしたまん中にばかりと卯平の顔が出た。ぶるぶると頭を振り、あと睡をはき、くそ

う、えらい骨を折らしやがった、と云つて、右手に持つていた栓を岸の草の上に投げて、きよとんと立つてゐる彦太郎の顔を見て、声を立てて笑つた。土堤の下の方で水の抜けるはげしい音が聞え、眼に見えて水面が下りはじめた。まるで河童じやな、あんた、と彦太郎が云うのに答えず、卯平は鋭い目附になつて注意深く池の中をあちこちと眺め廻した。脱いだシャツをまた着なおして、彦太郎も岸辺の叢などに眼をやつた。水すましが慌てたように水面を舞つたり、小さな青蛙が飛んだり、爪の赤い蟹が倉皇として逃げたりしたが、食用蛙の姿は見えなかつた。居らんぞ、あんた、と彦太郎が投げ出したように云うのに、卯平は何にもいわず、じつと池の面から眼を離さなかつた。彦太郎は退屈して又草の上に腰を下したが、何気なしに横を見上げた途端、彼は飛び上らんばかりに驚いた。一間とは離れていない小屋の窓に、髪をさんばらに顔に垂らし、ぎろぎろと大きな眼を見ひらいて彼を睨みつけている白衣の女の姿があつた。彦太郎は我にもなく驚愕した自分がてれ臭くなつたので、卯平に声をかけ、ごりよんさんはまださつぱりせんらしいな、と云つた。卯平はようやく水面から眼を離して、窓から身体をのしだして、泣くとも怒つたともつかぬ、くずれたような表情を湛え、日頃から大きい眼が、瘦せ細つたために、飛び出したように見える瞳を据えて、歯を噛むような声を立てて笑い出した女房に、いきなり掘んでいた泥を投げつけ、ち

ようツ、と動物を追うように怒鳴り、坐つて居れ、と叫び何か大きな声でお経のような文句を云つた。馬鹿、馬鹿、と女房は急に勢が抜けたように肩をすばめ、引っこんで、暗い土間に坐りこんだらしかつた。困つたもんだ、と卯平の精悍な顔にちらと悲しげな影がすぎたが、すぐにもとの元気な顔になつて、執念深い狐だ、今日で十日になるのにまだ出て行かん、戸まどいして女房に憑いたりなどして阿呆狐めが、歯がゆうてならん、その裏の稻荷の狐らしい、暴れて仕方がないので、呪禁まじないして貰つたらいくらかおとなしくなつた、何とも知れんことを口走つたり、何でも手あたり次第に投げたり、暴れるので危ないから、山の総円さんに来て貰つて、紙捩こよりで封じて貰つた、総円さんは飲んだくれのやくざ山伏と人はいうけれども、俺はつくづくと今度だけはえらいと思った、あまり暴れるので俺が大きな綱でぐるぐるまきに縛つておいたのに、どんなに頑丈にしといても何時の間にか抜けてしまうのだ、ところが総円さんは短いかんじんよりで手足の指を繋いで拌んだだけだが、それでもう自由がきかず、全くおとなしくなつた。一三二日中には必ず狐を追い出してやると総円さんも云つてゐるから、間もなく癒るだろう、ただ何にも食べないので、瘦せて行く一方で、それを見るのが可哀そだ、と次第に卯平は声を落したが、急に氣をとりなおすように、嬢も因果な奴さ、俺が道楽して居る間中苦労をさせて、とうとう赤瀬の親方にひどい迷惑をかけ

て、お詫びかたがたこの山の番人みたいになつたが、百姓仕事ばかりさせて碌な目にも合わせず、揚句にや狐にまで取つ憑かれやがつた。そう云つて卯平はおかしそうに笑つた。自嘲するようなその笑いは妙に空虚で、そのうそ寒い哄笑は、いきなりがんと彦太郎の胸を叩いた。彦太郎は眼を外らし、急にそわそわと落ちつかぬ風で、草の上から腰を上げると、まあ、ごりょんさんを大事にな、あんた、と云い捨てて、逃げるよう^{トランク}に赭土の斜面を駆け上つて行つた。どしたかな、彦さん、と卯平が腑に落ちかねて、もう少し居つたら池も干上つてしまはず、食用蛙が捕つたら、つけ焼にでもして久しぶりに一杯やろうではないか、と卯平が後から声をかけたのが、最後の方は遠くなつた耳にもう聞えなかつた。西瓜畑の間を駆け抜けて、道路に出ると、彼は慌てて待たせてあつた貨物自動車の運転台に飛び乗つた。運転手の沢田に急いで行くように命じ、トラックが動き出すと、ようやく安心したように坂の下を見た。卯平の姿が池の中に豆粒のように見えた。卯平が腹這いになつたような恰好をして何かを押えつけているらしく見えたのは、或いはどうとう食用蛙を見つけ出したのかも知れないと彦太郎は考えたが、それより彼は可哀そうな卯平の女房の居つた部屋の窓が気になつて、くねくねと曲折する道路のため、見えたり隠れたりするのを、努力して探したが、もう白衣の女の姿は見えなかつた。トラックは開墾地の間を縫つてゐる曲折の多い山

道を濛々たる土煙をあげよたよたと走つた。この辺は佐原山の頂上であつて、数年前までは笹や灌木などの密生した全くの荒蕪地であつたのである。竹の根が深く土中を縫つてゐるために開墾には不適当とされていたのであつたが、先年この地方に防空演習が行われた際、この佐原山の絶頂に高射砲陣地を作ることとなり、登山路としては幅三尺にも足りぬ道しかなかつたため、工兵隊が来て数日の間に幅二間を越える立派な登山道を作つた。演習が終つた翌年、上海事変が勃発したが、廟行鎮攻撃の際に戦死した肉弾三勇士は、その時の道路開墾工事に従事して居つたのであつて、佐原山の頂上には立派なる三勇士の記念碑もある。この登山道の開通はこの市にとつてはまことに感謝すべきことであつた。この道の開通を契機として、佐原山は公園化し、この山を中心として各方面に出る新道路が縱横に開設され、従つて道路を中心として荒蕪地として放任されていた山頂の市有地がどんどんと開墾されはじめ、現在では、どの丘も、どの斜面も、畠が連なり、果樹が栽培され、年々相当の収穫を挙げる農作地となつたのである。ここからはまともに蒼茫たる玄海灘を望むことが出来る。幾つかの島を浮べたこの荒海は、雲と船と海鳥とをあしらつて絵のごとく美しい。それ故に直接塩をふくんだ潮風を受けるために多少の風害はあるとしても、農民達は撓まざる努力に依つて、年々、大根、芋、葱などの野菜類はもとより、無花果、枇杷、梨、西瓜

などの果物類も豊富にとれるようになつたのである。これらの畠のある斜面につけられた道路を、彦太郎のトラックは疾走して行くのである。トラックに積んだ肥料桶がごとごととぶつつかつて鳴つている。二十荷のうち半分は空であるが、半分はつまつてゐるので、たぼたぼと時折音がする。彦太郎が卯平の所に寄つたのも、四荷ほど肥料を廻してくれるようとに頼まれていたからであつたのに、商売も忘れてしまつて彦太郎は逃げだして行くのである。嬢も因果な奴さ、と卯平の云つた言葉がぴんと胸にひびき、彼は、苦労させつづけている自分の女房と子供達のことを思い出し、今更のことではないけれども、日頃鼻柱の強い卯平が何時になくしんみりと述懐した様子が、やきがねのごとく彼の心を彈いたのである。今日で三月近くも彼は家に帰らない。三ヶ月前に帰つた時も、村の方に肥料を売りに行つた序に立ち寄つただけで、壊れた竹垣の戸を開けて入つて行くと、女房のとしのは畠で草をむしっていたが彼の姿を見ても表情を変えず、畠の横を通り過ぎて家の方へ行く彦太郎の背後から、顔も上げずに無尽会社が来とつたですよ、と一言云つたきりのろくさい手附でしきりと草をむしりつづけていた。赭ら顔を手でこすり、彼は家の前に立ちはだかつて、くすぶつた軒、土のはげた壁を、ひとわたり見わたし、字の見えなくなつた表札を凝視して、今に見て居れ、今に見て居れ、と呪文のごとく呴いた。坂田村の豪農として何代も続いた小森

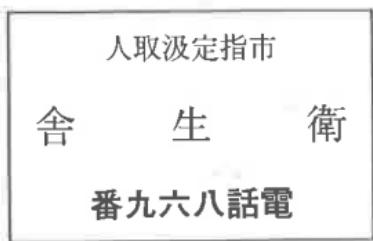
家は彦太郎の代になつて壊滅に頻して居る。鬱勃たる事業慾を押えることが出来ず、彼は山林の一部を抵当にして信用会社から資本の融通を受け、糞尿汲取事業を開始した。従来は百姓達が馬車を曳いて市の方に出て行き、市内糞尿の汲取りをして居たが、自分達に肥料の必要でない時には中止する。市内に何人か居る商売人も全部馬車か牛車であつて能率は涉々しくない。彼は桶及び二十荷を積めるトラックを一台購入した。汲取賃、肥料として農村へ売り捌く収益とを合算し、近代的方法に依つて市民の大半を得意に取り得るは必定であつて、必要諸経費を差引いても、相当の剩余金のあることは確実である。彼は意氣揚々として、周囲の人々の冷笑の中に開業した。ところが始めてみると、彼の算盤は片端から違算にぶつかった。第一、営業の許可問題でごたごたした。市中にはトラックを何処にでも入れることの出来ないために、桶用リヤカーを作り、汲取った桶を一定の場所に集めておいて、トラックを廻して積み込む外なく、一ヶ所ではトラックにしたことが用を為さないため、リヤカーも二つ作り、桶も八十荷作り、汲取人夫は六人もよけい雇い入れた。其の外、色々の事業の面倒な縡緯は省略するとして、彼が商売を始めてから十年間に、先祖から残されて來た山林田畠はもとより、家屋敷まで悉く人手にわたり、あるものとては、ただ、今に見て居れ、という彦太郎の執念ばかりとなつた。トラックも幾度か抵当に入り、幾度か差押えの

厄に遭つた。彼がひたすら失敗と没落の道をたどつて行つたのには、他の重要な原因として、彼がなかなかの酒好きであつたことがひとつ、もう一つには、この地方が非常に政治的にうるさいところで、政党政派の関係があらゆる商売取引に侵潤し、政党への顧慮なくしてはいかなる商売も成立しなかつたことが、ひとつである。彼は村にも家にも帰らなくなつた。帰れなくなつたことが本当かも知れない。海滨に近い野原の片隅にトラックを入れるバラック小屋を建て、その横に四畳半の一部屋をこしらえて其処に起き臥し、不自由な自炊をした。初めはがみがみと叱言を云い、中頃には愚痴をこぼしていた女房も、この頃ではなんにも云わなくなつた。村に肥料を売りに岡かける時折に、家に立ち寄つてみるのであるが、何時行つても女房のとしのは畠に出ているか、藁を打つているか、機を織つていていた。十一になる徳次と、八つになつて今年から学校に行くことになつた千代子とは父が居なくとも元気に大きくなつた。心からの親しみを見せない子供を淋しく思つたけれども、今に、ゆつくりと一緒に暮すことになる日があると思い、その時こそ心行くまで楽しい生活が味わえると思つた。村の誰彼が彼を目して、低能といい、阿呆といい、お人よしといい、全く馬鹿のひとつおぼえ、「長久命の長助」だと、嘲笑して居ることも知つて居る。今に見て居れ、という言葉は彼の宗教のごとくなつた。工兵隊の作った山道をトラック

は古びた体軀をがたつかせながら、下りはじめた。警戒しながら速力をゆるめると、急にさあつと冷たい風が横から頬をうつたので、我に返ったように彦太郎が見あげると、亭々と聳える杉林の上は、何時の間にか、いっぱいの黒雲に掩われてのしかかるよう暗く、同じように顔をあげた運転手と眼を見合させ、瓢箪のような顔の沢田が、眉をひそめて口を尖らせたが、ほつりと、頬にひとつ、来たという沢田の声に命令されたように、さあと大粒の雨が一齊にまつ白く降りだした。石臼をひくように遠くから起つて来た雷が、いきなり頭のま上で恐ろしい音を立て、杉林にひとしきりはげしい雨の音を叩きつけた。赭土の道に豆粒をまくように穴をあけてつきささるはげしい雨脚を眺めながら、彦太郎は、ひよつくり、吃りの天野久太郎のことを思い出し、今夜は是非天野を説得して組合のことを協議しなければならぬ、と思つた。

朝早く、車体検査のため、沢田がトラックを運転して出た後、彦太郎は油で汚れた手を洗濯石鹼で洗つて、柱に腰を下すと、昨夜残しておいた焼しょうちゅう酎しゅうのあつたのを思い出し、細目の金網の張つたみずやの中から一升徳利を取りだした。栓をとつて覗いてみると、半分程あるらしいので、彼は人の好さそうな笑いを浮かべ、湯呑茶碗についてで、ごくんごくんと飲んだ。咽喉を透る痺れるような気持をたしなむように眼をつぶり、右手で胸を押え、しばらくじつとしていた。食道をすぎて胃袋に入つて行くのが

はつきりわかり、精気がついたように身体中が膨れて来るのを感じた。これで今日も一日元氣で働けると思い、彼の苦難に満ちた四十五年の生涯が、この一杯の焼酎の中に溶けこんでしまったような、洋々とした気持になつた。三杯ほど引っかけ、立ち上ると、集金帳を下げて表に出た。ぎらぎらと光る砂が彼の眼を射すくめたが、陽炎のあがるその砂丘の向うに、幻燈のようにまつ青な海が横たわり、防波堤に白い飛沫をあげて、だうだうだうんと鳴っていた。彼は大きな欠伸をして、トラック小屋の上に近頃塗りかえて揚げた新しい看板を振り仰いだ。



純白なペンキの色が一層彦太郎を楽しくした。今度入れた市指定の三字を何度も繰り返して眺め、よしよしという風にもつたいらしくうなづいた。それからトラック小

屋の裏手に廻ると、大きな声で、ようい、居るか、と呼んだ。はあい、と掘立小屋の中から鈍重な返事が聞え、赤鑄びたトタンの扉をめくつて、長髯をしげきながら、ひょろ長い李聖学の顔が出た。これから集金に廻るが従いて来んか、と彦太郎がいうと、急に顔を顰めて、どうも昨夜から腹が痛いですから、と云い、返事も待たず、馬鹿にしたような薄笑いを浮かべて、がたんとトタンの扉を下してしまった。彦太郎が舌打して、旱魃で水量の減った唐人川に沿うて下つて行くと、背中に、堀立小屋の中で、妙な節廻しで李聖学が朝鮮の歌を喫鳴つてゐる声が聞えた。その間ののびた歌声は明らかに彦太郎を嘲弄した調子を帶びていたけれども、彦太郎は一向通じない様子で、自分も釣られたように、口三味線を入れながら、三勝半七酒屋之段の一くだりか何かを口吟み出した。この浮かれた気分は彼にとつて彼を実に幸運な事態にみちびいた出来事が起つた。彼がしまいには手で調子を取りながら唐人川の最下流にかかる土橋をわたりかけた時である。いつたいこの幅一間に足りない小川はこの市にある唯一の溪流で、佐原山の裏手に連なる 笹倉山の奥に源を発しているのであるが、昔、明治初年頃、滔々として文明開化の流れがこの一寒村にも沁みわたつて來た時、この附近にコーケス工場が出来、一人の仏蘭西人が技師としてその頃の人達が眼を廻したほど高い給金で雇われて來たが、その外国人がこの小川に砂金が採れるなどと云い出し

一時非常に騒がれたことがあつた。その為に全くの海浜であつたこの小川の下流にたちまち部落が出来てしまつたほどである。その為昔はこの川には別の名があつたのであろうが、何時の頃からか唐人川と呼ばれるようになつたのである。明治初年頃には二百戸に満たない一漁村であつたこの市は、鉄道の開通、築港の完成、石炭の採掘積出し、等によつて急速に進展したのであるが、この唐人川の下流に砂金の宣伝によつて出現した部落は、この発展の中心から全く置き忘れられたように、昔のままの姿であつた。コーケス工場も何時の間にか無くなり、その外国人も何処に行つたやら消えてしまつたが、ここに残つた一割の部落は、その後町の発展の圈外にありながら、一つの任務を帯びるようになつた。このドノゴオ・トンカは、金を探るかわりに塵芥こみを取る部落となつた。村は海岸に望んで五十戸程密集し、背後の丘の上には赤煉瓦の市立塵芥焼却場があつて、百七十尺の高い煙突が聳えて薄黒い煙をはいている。海浜や道傍の到る処に塵埃の山があり、馬車が何台も道につながれてあつて、足の太い馬が毛の抜けた鬣を振つて懶そうに嘶いている。彦太郎はつひが唐人川の土橋に足をかけた途端、それらの塵芥の山の一つに立つてゐる三人の拌天姿の男が、ほれ見い、糞男が行くぞ、生意氣な奴だ、この頃、俺たちの仕事の邪魔をしようとして居やがる、とかなんとか、がやがやと話し出したと見る間に、腰をかがめて、塵芥の山から、ブリキ罐や、釘の

折れや、竹切れなどを拾つて、塵の礫を飛ばし出した。刺のあるこれらの手榴弾は雨霰と彦太郎の背後に落下したけれども、そのけたたましい音を耳にしながらも、彦太郎はそれが自分を襲う敵弾だと考え及ぶには、幸にも、あまりによい機嫌になり過ぎていたのである。罐詰の殻が彼の右足に命中したにもかかわらず、彼は振りむこうともせず、今ごろは半七さん、何処にどうしてござらうぞ、と、一層調子を高めながら、悠揚せまらず、橋をわたり、町の方へ出て行つた。

集金帳を繰りながら、彼はあちこちの家に立ち寄つた。大黒様のついた黄色い財布は次第に錢で膨れて行つたが、彼は次第に先刻からの気分を失いはじめて、だんだん憂鬱になつていて。一ヶ月勘定になつてゐるので、僅かな汲取料金であるし、歩きさえすれば、すぐにでも集金は済みそうなものであつたが、実際はそうではなかつた。三べんも四へんも足を運ばせ、誰が居ないから判らないとか、今日は都合が悪いとか云つた揚句、ようやく五度目位に、やつとくれるような家が何軒もあつた。先月までは家族五人だつたが、娘が一人このほど嫁に行つたから、十錢だけ引いてくれ、などといい、引かなければ他の汲取人に頼むからとすぐ云うので、仕方なしに割引したりする家も何軒かあつた。汲取り方が悪くて不潔で仕方がない、あんな取り方をするなら金を払わぬ、と叱言を云い、今後注意しますからと平身低頭して陳謝すると、なお

も飯時に取りに来て貰つては困るとか、色々と口喧しく云つた揚句、今日はいかんから明後日頃来てみてくれ、などという家もあつた。一ヶ月普通三十銭、家族の多いところで五十銭位なのだが、集金のたびに出合うこういう事も、長年のこととて、最初ほどむきになつて腹が立つたり不愉快になつたりすることはなく、馴れてしまつてはいるのであるが、やはり、どうにも面白くなく、こんな目に合うたびに、彦太郎は何時も親切な赤瀬氏の奥さんを思い出す。赤瀬氏の奥さんはいつ汲取りに行つてもにこにこして、御苦労さん、ありがと、と云いながら、いくらかの酒代をかならず包んでくれるのである。赤瀬春吉氏は彼の事業にとつては更生の恩人である。しかしながら、夕方近くなつて、大抵一廻りすんだ頃には、例のごとく、もとの気分に返つて、膨れた財布を胴巻に入れ、少し得意を増さねばいかんと思い、心当りの家々を訪れて頼んで歩いた。歩き疲れて、日の暮れ近く、トラック小屋に帰つて来ると、トラックも帰つて居つて、運転手の沢田がバケツに水を入れてタイヤを洗つていた。御苦労だつたなあ、と声をかけると、ああと横柄に答えて、眼鏡の下から見あげるよう、今度は六ヶ月間でしたよ、うまく行きましたが、もうシリンドラは取り換えた方がええですな、と口を尖らせて云つた。仕方がないな、と彦太郎は答え、老齢のため何かと修繕代の嵩む自動車を一寸怨めしそうに見たが、もとよりそれは心からの恨みでは毛頭なく寧

ろ長い間、自分と苦難を俱にして来たために、こんなにも古ぼけた傷ましい姿になり果てたトラックへの限りない哀惜のこころであつた。彼は一寸感傷的になり、赤瀬の大将に相談してみるから、と沢田に云い捨てて、小屋の裏に廻り、金本よ、トラックが帰つたから明朝は高崎町方面と学校の方へ廻つてくれ、外の者にも伝えてくれ、とタタンの扉を叩いて云つた。金本というのは李聖学の日本名であつた。朝鮮人は内地に来ると皆日本の名前をつけるのだ。はあい、と中から睡そうな声が聞えた。急に腹の減つたのを思い出し、小屋に帰つて来ると、框に腰を下して、一升徳利に口をつけ、ごくんごくんと飲むと、食道を焼酎がじいんと鳴つて通り、胃袋に来て胃壁に沁みわたつた。焼酎は一口しか残つていなかつた。顔が火照りはじめ、身体が温もつて来ると、横になつたが、疲れが出て来て、沢田が自動車の掃除をすまして出て行きたがら、小森さん、ガソリンも切れでますよ、と喚いて行つたのに、返事をしたようでもあり、せんようでもあり、土間に転つたまま、眠つてしまつた。やがて、歯軋りをはじめ、があと大きな鼾をかきはじめた。気がつくと彦太郎は小高い丘の上に天野久太郎と二人で立つてゐる。今まで彼の商売敵であつた背の低い猿のような久太郎が、古風な山高帽を被つて彼の傍に居るのが、同じような久太郎が一人居るように見え、四人位居るようにも見え、彼はふつと気がついて、なるほど今日は汲取人組合の発会

式なのだと思い出した。すると足もとからすると旗が上り、妙に細長い白い旗が見あげる天空に翻えつた。天野久太郎は顔をあげて、くるくると丸い目を輝やかせながら、今まで、お互が無駄な競争をして居つたのは大いに間違いであつた。今後は大いに協力一致、手を取り合つて進もう、我々の団結に依つて、横柄な得意の人達にも思い知らせることが出来るのは愉快なことである、我々が競争し、得意を奪い合つたために、段々と汲取賃が低下したことは何という馬鹿げたことであつたか、かかる不潔なる仕事をしながら、安い汲取賃の支給を受け、しかも聞くに堪えぬ侮辱を受けなければならぬ道理はない、組合が出来た以上は、も早、市民は協定以外の料金を以て、如何なる者にも汲取りを依頼することが出来ない、割引きしなければ別の者に頼むといふ言葉を以て我々を脅迫することは出来ない、考えれば汲取料金は月一円でも安い位である、我々が清掃に従事しなければ市民はいつたいどうするつもりであるか、自分で棄てに行くか、さもなければ、排泄を停止するの外はないではないか、と、演説しあげたのであつたが、彦太郎はその通りであると思い、久太郎は吃音どもりであつた筈だがとひよつくり考えいたり、滔々と淀みない雄弁をつづける久太郎の口元を不思議そうに見つめた。拍手が起り、すると、花火があがつて、何か沸々とたぎるような音がしあじめ、眼下に見下される町の中から叫喚の声がどろきはじめると見る間に、

町は沸きたち、あふれ上つて来た黄金の糞尿の流水の中に沈みはじめた。溺れ、救いを求める人々の中に、彦太郎は、汲取り方が悪いから金を払わんと云つた会社員の顔や、家族が減つたから十銭引きなさい、でなかつたら他の者に頼むから、と云つた果物屋の主婦さんおかみの顔や、を見た。ごうごうと音立てて溢れた糞尿の中に、またたくうちに町は沈没してしまい、折から上つて来た太陽が黄金の上に反射して美しく輝いた。久太郎が猿のように歯をむき出して笑う声に、ひょっくりと彦太郎は眼を覚ました。まつ暗なので、彼はまだ夢を見ているのかと思つたが、手探りで電燈のスイッチを捻ると、巨大な昆虫のうずくまつたように、緑のペンキで塗つたトラックが眼の前に浮かび上つた。彼は、何故か、こみあげて来る笑いをどうしても押えることが出来ず、にやにやと唇をほぐし、とうとう腹をゆすつて大声で笑い出した。

日がかけつてから家を出た赤瀬春吉は、窓の外に秋を告げるような蜩の声を聞きながら、首だけ出して、湯の中に浸つていた。町から相当離れた海浜にある、温泉と名だけついている、この湯に、今日は誰も居なかつた。波の音も聞え、松籟の音もし、何処か山陰あたりの温泉地にでも旅したようなゆつくりと落ちついた、よい気持であつた。彼は両腕を伸ばして力を入れ、狭い湯槽の片方に背を靠せ、足を伸してつづつた。そういう子供らしい動作を楽しみながら、何時とはなしに謡曲の節のような声

を出して唸つてゐると、横手の潜戸が開いて、おせいというこの湯屋の女が顔を出して、友田さんがお見えになりました、と告げた。古ぼけた朽木のような潜戸の間から出たおせいの顔は、額縁にはめられた肖像画のように美しかつた。色は浅黒かつたが、細面の顔に三日月形の眉毛がいかにも婀娜っぽく、一重瞼の情をふくんだ眼附は、彼に錦絵の枕草紙をすぐ思い出させ、赤瀬春吉は既にこのほどから、どうにも抑えきれないおせいの幻影につきまとわれ、もうだめだと観念していたのである。おせいの声に我に返つたように一言、そうか、と答えた。先達来、友田喜造から一度会つて色々と話したいからと云われていたのを、会つたところで仕方がないと思い、色々口実を設けて外していたのだが、是非ともと、うるさいほどの催促が來るので、それではと、赤瀬の方から、この場所を指定したのである。もとより赤瀬はおせいが居たためであつて、市中から相当離れたこんな辺鄙な処なら、億劫がつて友田も出ては来ないだろうと考へていたのである。ところが、友田は約束通りやつて來たらしい。来ないことの方を、おせいを見た時から一層希望して居たのに、のこのこ出て來るとはよくよくの事に違ひないと想い、喧嘩はしないことにしよう、と考えて居ると、また潜戸が開いて、やあ、と真裸になつた友田喜造が手拭をぶら下げる入つて來た。無造作に股間を濡らすと、とほんと跳ねるように湯槽に飛びこんだ。狭い浴槽の縁を越えて白っぽ

い湯水が溢れた。遅うなりました、と友田は改まつたように挨拶した。こうして、一間四方の浴槽の中で、両派を代表する親分と云われる二人の男は無造作のごとく対峙したのである。鳶のように光る瞳をみはつて、よい身体ですな、だいぶんありますよ、と瘦せぎすの友田が手拭で首筋を洗いながら云つた。最近体重器にかかりませんが、正月頃用件で郷里の広島に帰つた時には二十三貫ありました、団体ばかりで恥かしい次第ですよ、と赤瀬が云うのに、いや、羨しいことです、我々のは恥かしくて何貫目ありますなどと人様には云えませんよ、たいてい贅沢もし甘味しいものも食べてみるとんだが、性なちでしよう、一向効果がありません。そう云つて両手を差上げたが、両肩から手首近くまで、自来也の刺青はりものがあるのが、濡れているせいであらうか、巻物を咬えた蝦蟇がまの眼玉がぎろぎろと動いて赤瀬を睨んだように見えた。赤瀬も太つた左腕をあげて、渦を卷いている龍の顔の上をなでながら、お互若氣のいたりと云いながら、馬鹿なことをしたものですよ、親から貰つた身体を汚してしまつて今更取り返しのつく話ではないが、時世の変つたこの頃では氣恥かしくてうかうかとは裸にもなれない始末です。その通りです、赤瀬さん、あなたのは片腕だけでなんばかましですが、あたしは全身なので、若い頃にはそうでもなかつたが、年とつたこの頃では寒い頃には身体を締めつけられているようでやりきれません、風邪でも引いたりすると、ずきず

きと痛むこともあります。痛い目を我慢して若い頃というものはお互無茶をしたものですが、もつともあの頃はこれで威しもきいたし、賭場にはぐりつけに行つても、この刺青いれずみが長脇差さばくの代りになつたような事も、あるにはあつたのですよ、はははは、とおかしくもなさそうに笑つた。赤瀬も苦笑したが、そこで話が途切れで二人は云い合わせたように窓の外に眼をやつたが、腰硝子越しに、芋畑が見えて、広い芋の葉が風をうけて、団扇をふるようになさかさと鳴つて動いていた。ところで、と友田は別に大したことではないと云つた表情で、小さい眼をくりくりさせ、この間からお話ししたいと思つていたというのは、外でもありませんが、あなたに是非とも民政党に入党して貰いたいのです。赤瀬が首だけ出したまま、芋畑の方を見て返事をしないので、実はこのことはあたしとしてもどうしてもそうして貰いたいと思つているのですが、また、大親分の豊島氏の非常な希望でもあるのです。現在ではこの町では我党でなければ人でないと云う風に云われてゐることは、もとより、あなたもよく承知のこととは思いますが、打ちあければ、何分にも多数を以てたいていの事は押し切つて行きますが、ほんとうに筋道立てた議論を吐く押しの利く人物というものがあまり居りませんし、あなたの属している中立や政友会などの党派には些すこかも驚きませんが、お世辞を云うわけでは決してないから誤解されると困りますが、あなた個人の力だけ

が、我々にとつて少しばかり恐ろしいのです、どうでしよう、この町では昔から代議士の豊島大親分が居る間は、いかに政友会や中立がじたばたしても、金輪際、うだつの上るためしのないことは見えすいています。この際、思い切つて民政党に入党してはどうでしようか、あなたが民政党に入党してくれれば、實に鬼に金棒であります。もとより、あなたを平の党员では決しておきません、これは既に内定していることでありまして、幹事長になつて貰い、次回の県会議員の候補には是非あなたに出ていただくなつもりであります。この五月の市会議員の選挙に最高点で出られたあなたの潜在力には全く驚いて居ります、しかし我党が十八名候補者を立て、悉く当選したことも大いに誇るに足ると思つて居ります、一考して下さいませんか。ぼつりぼつりと話す友田の言葉が切れるごとに、赤瀬はなおも表の芋畑に眼をやつたまま、趣旨はよくわかりました。わたくしごときものにまことに過分の言葉であります、然しながら、わたくしはいつも申しあげますように、憲政の大道として、中央政治はやむを得ませんが、地方自治体に於ては政党の必要なしというのがわたくしの持論であります。現在、当市にありましても、この政党関係のためにいかなる弊害を被つて居るかということは今更ここで例をあげて申しあげるまでもなく、演説会やその他で長年の間わたくしが、いや、わたくしではありませんでした、市民識者の輿論が実情を指摘して居

るところであります、なるほど豊島氏はえらい方であると敬服して居ります、しかしながら、豊島氏の率いる、というより豊島氏をいただく民政党というものが、当市において勢力を有し、何事も左右し、多くの場合党利党略に終始して、市民の福利をかえりみないことはまことに遺憾に思つてゐるのであります、さきほど、十八名が全部當選したというお話がありましたが、それらの人々は常日頃から人々に爪弾きにされて居つた人たちが多いのに、どうして普通で當選が出来ましよう。悉く買収によつたことは、わたくしが申しあげるまでもないことではあります、不肖何ごともわきまえないわたくしが市民諸君の推薦によつて市会議員に出ました以上は、わたくしも男でありますから、なるほど大きな傘の下に居れば雨には濡れないかも知れませんが、正しいと思うことのために進みたいのであります。多くは申しませぬから、以上のことを御諒承下され、豊島氏によしなにお答え下さるよう、お願ひいたします。よく、わかりました、あなたの決意のほどを諒承し、ふたたび繰り返しません、お互の正しいと考えた立場に立ち、たたかう外はありません、失礼いたしました。そうして二人はようやく云い合わしたように芋の葉から眼を離して、顔見合させた。二人の眸には何かしら殺氣のようなものがあつたが、友田は手拭でぶるぶると顔を洗い、話は別ですが、今度、参事会で、市営建造物の糞尿汲取を小森彦太郎という者の名義になつて居る衛

生舎に指定されたことについては、あたしは丁度親族の不幸のために欠席して知りませんでしたが、あなたが非常に尽力されたということですが、ほんとうですか、と訊いた。わたくしが特に衛生舎のために尽力したというわけではありませんが、市の予算も少ないし、従来やつて居つた太田というものが欠損つづきでどうしてもやれないと云つて居つた時であるし、衛生舎はトラックを持っているというので、参事会で意見が一致し、市の指定ということになつたわけであります、市営建造物というのは、御承知のごとく、小学校が六ヶ所、共同便所が四ヶ所、海員児童ホーム、公会堂、市役所、教員住宅、等、三十ヶ所に及び、普通の牛車や馬車ではどうしても汲取能率があがらず、トラックのある衛生舎が、と云いかけるのを途中からとつて、あれはあるたの事業ですかと友田はまた横をむいて云つた。わたくしは何にも知らないのです、あれは、と云いかけるのを、また、小森彦太郎にはあなたが金を出してやつたそうではありませんか、と云つた。いや、あれはなんでも、昨年頃、小森が無尽会社の借金の抵当にトラックをとられて、商売が出来ず泣きそうに弱つていたのを、わたくしの家内が可哀そうに思つて、金を貸してやつたそうであります、わたくしは後で聞いて知つた位で、もとより小森の事業にはなんの関係もありませんよ。そうですか、あの男はあたしがだいぶん世話を焼いてやつた男なのですが、いや、よくわかりました、

あまり長湯をしたので、少しのぼせ気味になつて来たようですが、これはラジウム鉱泉などと云つて居りますが、どんなもんですかな、と云いながら、友田は立ち上つて、伸びをし、浴槽から出た。彼は窓に向かつて赤瀬に背中を見せ、秋ですね、と云つた。芋畠には真横から西日があたり、芋の葉が土の上に長い影を落としていた。八股大蛇おろちの八つの首が大きな口をあけて素盞鳴命に集中し、命は赤い血溝ちあせのついた剣を振りあげているが、その赤い血溝のある長い剣を見ながら、この男はいつか誰かに殺されるに違ひないと、赤瀬は何故ともなくそう思つた。表を見ながら、近ごろはよい賭博ばくちでも出来ますか、と友田が云うのに、浴槽の中から、いや、賭博はやめましたよ、と赤瀬が答えると、失礼しました、と友田は静かな口調で云つたが、潜戸を開けて出て行つた。潜戸はいきなりぱあんとはげしい音を立てて閉まつた。それは古ぼけた縁の釘が飛んだほどの烈しさであつた。浴槽の中の赤瀬が苦笑を浮かべていると、潜戸が開いて、どうかなされましたか、と、おせいの顔が出て云つた。美しい女だ、と思い、なあに、なんでもないよ、友田さんが帰つたら出るから、鱸の背せごしでもこしらえて、酒の支度でもしといておくれ、久しぶりでいい気持になつた、今日はゆっくりして行こう、と云つた。

市内に於ける糞尿汲取人組合の結成のことで、毎回集まる者の少ないため、何十回

も集会がお流れになつていたが、今夜は彦太郎が一杯買うからと云つたのに釣られたのか、六人のうち四人の顔が揃つた。あとは隈井というのと天野久太郎が来さえすれば全部揃うのであつた。彦太郎は無い懐をはたいて大英断をやつた。今夜少々金を使つても組合さえ出来れば取り返しはつくと思うのだ。かき舟の一番奥の座敷で、鍋の中にかしわが沸々とたぎり、既に盃も相當に右往左往したあとで、誰も赤い顔をして、声も大きくなつて居た。顔の大きな年増の芸者が一人、瘤高い声で間不断なく喋舌つていた。組合などのことはまるきり興味のなさそうな同業者達に、口を酸っぱくして彦太郎は、組合の必要なことを説き、どうにかこうにか、そういうことなれば作つてもよいという空気にまで漕ぎつけたのだが、彼等は今までお互に得意の争奪をやつて來た手前、お互の顔を盗むようにちらちらと見やつては、猜疑深い表情を消さなかつた。酔いが廻るにつれて彦太郎は自分の説得が効果を現わしたことで嬉しくなり、さあ、みんな、愉快に飲もうじゃないか、土方の喧嘩で頭割りなどと、後から決して云いはせんから、どんどん飲んで貰いたい、間もなく隈井さんも天野さんも来るだろう、天野さんが賛成であることはわしが太鼓判を押しておく、こないだ面白い夢を見た、まあ、聞いておくれ、あんた、と先夜見た夢の話をし、あれは正夢に違わん、わしの考えて居ると同じことを天野さんが云つて居つた、隈井さんには聞いてみなければわか

らないが、外の者全部が作ろうというものを、隈井さん一人で反対はせんに違ひない、どうだ、芸者さん、これからは肥料取賃を女に限り倍にするぞ、どうも男より女は汚のうていかん、月のもんでもある時にはうんざりするぞ、と云つて盃をかかえたまま愉快そうに笑つた。なに云うてんのや、男さんの方がよっぽど汚ない、と云つたが顔まけしたかたちで、あんたたち、始めからしまいまでうんこの話ばかりして、御馳走の味おまつか、と云つて笑つた。うまい、と白髪を垂らした吉村長吉が、赤い鼻の頭をぼりぼり搔きながら、金蠅まで話を嗅ぎつけやつて來たぞ、と云つた。酔が廻るにつれて次第に打ち解けた空気になり、歌も出、朝鮮人の同業者が二人居たが、それも、何やら奇妙な筋廻しで、朝鮮の歌を喫鳴り出した。ああ、そいつは知つてゐる、と彦太郎は大声を發し、わしのところの金本や大山達がよく酒を飲んではやつて居る、チン、チンチンナアレ、チヨツタチヨツタ、とうたい出すと、朝鮮人達も手を打つて和した。駄目よ、そんな外国の歌、日本の歌をうたいなさいよ、と芸者が云つてそれでもいい加減に三味線を鳴らして合わせてゐるところへ、襖が開いて、背の低い、ずんぐりした印度人のような天野久太郎が入つて來た。天野は空いている座蒲団の上に落ちるように坐ると、ものをいう前の癖で、ぐうと息を吸いこんで、眼を白黒させ、お、

お、お、遅くなつた、す、す、すまん、とだけ云つた。やあ、よう来てくれたな、あんた待つて居つたが遅いので始めたところだ、さあ、一杯、と盃をさし、自分で徳利を持つて注ぎながら、この組合のことでは随分長い間骨を折つた、でも、今日は嬉しくうてこたえん、あんたとも何べんも話したことだが今まで、お互が無駄な競争をして居つたのは大いに間違いであつた、今後は大いに協力一致、手をとりあつて進もう、我々の団結によつて横柄な得意の人達にも思い知らせることの出来るのは愉快なことである、我々が競争し得意を奪うために、だんだんと汲取賃が低下したことは何といふ馬鹿げたことであつたか、かかる不潔なる仕事をしながら、安い汲取賃の支給を受け、しかも聞くに絶えぬ侮辱を受ける道理はない、組合が出来た以上は、も早、市民は協定以外の料金を以て、如何なる者にも汲取りを依頼することが出来ない、割引きしなければ別の者に頼むという言葉を以て、我々を脅迫することは出来ない、考えれば汲取料金は月一円でも安い位である、我々が清掃に従事しなければ市民は一体どうするつもりであるか、自分で棄てに行くか、さもなければ、排泄を停止するの外はないではないか、と、これはどこかで誰から聞いたような文句だと思いながら、興奮して一気にまくし立てた。彦太郎の演説の間、ひとりで盃を何杯も重ねていた天野は、ぐつと酒を呑みこみ、胸を反らせ、息を吸いこんで眼を白黒させると、わ、わ、わし

は、く、く、く、く、組合は、は、は、反対だ、と云つた。いい気になつていて彦太郎は愕然として、どうしてな、あんた、どうして、組合には反対か、あんた、と意気ごんで訊ねた。天野は猿のような顔ににやりと薄笑いを浮かべて、傲然と、わ、わ、わ、わしも、ト、ト、ト、トラックを、か、か、買うことにして、く、く、く、組合なぞ、わ、わ、わしは、か、か、か、か、かたらん、と云つて立ち上り、兵隊のように歩調をとつて出て行つた。呆気にとられて彦太郎がぼんやりしていると、お邪魔でした、とか、失礼しました、とか、日々に逃げ口上を述べて、みんな、そそくさと立ち上り、先を争うようにして出てしまつた。まるきり颶風が一過したに外ならなかつた。散乱している餉台の上を眺め、彦太郎はしばらく茫然として、なんのことやらわからなかつた。ようやく少しずつ事態がはつきりして来ると、手に持つたままにしていた空の盃を置き、うつむいてためいきをついたが、やがて思いなおしたように顔をあげ、やれやれ、なんのことだ、との李阿弥か、と呴いて、棄鉢のように声を立てて笑つた。芸者も取りなししようがなく、徳利をとつて、おあけなさいよ、とだけ云つた。うん、ありがとう、あんた、もう酒の味もせんわな、と彦太郎は答えたが、急に氣をとりなおしたように、馬鹿たれ共が、もうあんな奴等相手にしたつて仕方がない、ああ、飲みなおそう、と冷たくなつた盃をぐつと乾し、いっぱい、と芸者にさした。ふと、先

刻天野の云つた言葉が胸に浮かび、天野はトラックを買うことにしたと云つたようであつたが、天野にそれだけの余裕があるとは全然考えられず、トラックはもとより、最近一層騰貴した諸材料のことなどに考え及び、あいつ、法螺を吹いたのかと考え、どうも変だ、おかしい、おかしい、と呟いた。ほんとにおかしな人達やわ、と芸者は話の緒口いとぐちを見つけたように、あんな変な人達と色んな話をするなんて骨が折れますな、と取りなし顔に云つた。ほんとうだよ、あんた、と、もう彦太郎は機嫌をなおし、あんな糞くそたれ共、勝手にしやがれ、わしも男だ、一人でやつてみせる、負けるものか、とぐいぐいと続けさまに盃を空けた。芸者に三味線を弾かせて、なかなか渋い声で、びんほつなどをうたい、女にもうたわせ、往年の蕩児はすつかりよい気持になつて時間じかんを過したが、下でラジオが九時半の時報を報じている音を聞いて、我に返つたように、勘定を命じた。二十四円何がしの計算書を見た刹那には、ちよつといまいましそうに舌打したが、芸者にも一円の祝儀をやり、仲居にも一円やり、芸者が送つて行こうというのを断つて、そこを出た。

町はまだ明かるく人通りが繁かつた。鈴蘭燈の強烈なネオンが眼にちかちかと刺すようを感じ、彦太郎は蹣跚たる足どりで、人混を縫いながら、劇場のある横町に入りこんで来て、弥次郎兵衛というおでん屋に入つた。さつと天井にとりつけた扇風機の

風が彼の顔をあおった。朱塗の台に肱をついて腰を下すと、奥の方にある卓をとりかこんだ五人連を見やつたが、凡その見当をつけて来た彦太郎のかんは見事に的中した。このおでん屋は天野の行きつけということを知つて居たし、ここに来れば何か秘密を解く鍵にぶつかるかも知れないと思つて時間を見はからつて寄つたのだが、彼が繩暖簾を排して入ると、片隅で大声を立てて笑いながら高話をしていたのが、ぴたりと鳴りやんだ。こちらに背をむけて、中央の禿げ上つた平べつたい頭を振つて居つたのは、確かに吃りの天野久太郎で、先刻までかき舟と一緒に居つたのが、金京善と吉村長吉と二人、欠席して顔を出さなかつた角刈頭の隈井運平、それに、正面に見えた顔は、選挙の度に何時も顔を合わせる、皆田という頭のきれいに禿げた金物屋の親爺であつた。鳴りを鎮めた五人は、急にひそひそと何か顔つき合せて囁いて居つたが、姐姐さん、ごあいそ、と皆田老人が云つて、金を払い、まつ先に天野が出て行き、続いて一人ずつ出て行つて、皆田老人一人残つた。皆田老人は立ち上つて、彦太郎の隣に腰を下し、やあ、小森さん、珍しいな、五月の選挙以来初めてですな、商売忙しいでじよう、と猫撫声を出し、ああ、皆田さん、あんたも達者で何よりで、と彦太郎も応じて、むかつく気持を抑えかねながら、顔は笑顔になつて、会釈した。ところで、小森さん、君は民政党を脱退したということを聞いたがほんどうですか、と皆田は狐の

ような表情になり、彦太郎の顔を覗きこんだ。いや、わしはもう政党なんかに関係して居るのが、嫌になつたのですよ、民政党だけでなしに、二度とどんな政党にも関係しませんよ、あんた、と、答えると、ははははは、と何がおかしいのか、歯のない口をあけて笑つて、君は赤瀬の児分になつたのでしょうか、そうでしよう、と詰問するよう云つた。そんなことはないですよ、と云うのを途中からとつて、まあ、そんなことはどうでもよいですたい、君が君の事業を大切にすることは当たり前ですからな、しかし、人の仕事にまでけちをつけるようなことはして貰わんがよいですな。彦太郎は一寸その意味がわからなかつたので、まじまじと皆田老人を見つめたが、薄べらな唇を見つめ、汚れた額を見つめているうちに、ようやく、皆田老人が、唐人川の土橋の夢によつて出現した部落の人達の事業としての塵芥取りは、市予算経常部の中に汚物掃除費の中、汚物搬出馬車請負賃として計上されて、指定掃除人ということになつてゐるのである。同じく、市の汚物掃除費のうちに含まれてゐる糞尿汲取請負賃と並んでゐるので、従来、その金額のことが、色々な政治的な意義を含めて対照され、比較され、何かと引き合に出され、つまり、糞尿汲取請負賃に比較し、汚物搬出馬車賃が格段に多額であるということが、常に論争されて來たのである。汚物搬出の方は何等

問題が起らないに反し、糞尿汲取の方は常に問題を起し、市指定の汲取人は既に何人か更迭し、長続きがせず、遂にトラックを有して居ることのため衛生舎に指定されたわけである。露骨に云えば、糞尿汲取を増額しなければ、塵芥搬出の方を減額しろということになるので、そこに相剋があつたわけである。そういう意味だと、ようやく、彦太郎は皆田老人の云つた言葉を理解し、いやいや、あんた、わしは人の仕事の邪魔などしませんよ、と答え、人の好い微笑を湛えて、飲みませんか、と錫かんをさした。それを受け取つて、小女に注がせながら、小森さん、君は民政党に楯ついて、碌なことはないよ、と云つて、馬鹿にしたような、脅迫するような、獲物を前にして舌なめずりするような、下卑た薄笑いを湛えて、じつと彦太郎を見た。どぎまぎし、ひよつくり、皆田は友田喜造の腹心の者だつたことに思ひいたり、背後に友田の鳶のようないい眼附を感じて、途方に暮れた気持になつたが、ようやく、気をとりなおし、自分の事業だけはどんなことがあっても守らねばならぬと思つた。なおもへんにからんで来る皆田を残し、金を払つて、逃げるよう夜の中に出了。彼が生涯を賭して來た事業をおびやかす者が背後に迫つたような不安な気持の中で、彼の事業に対する限りない愛着が沸々と湧きいでた。混迷して來る気持を整理することが出来ず、すたすたと足を早め、煙につつまれたような氣持で歩いているうちに、ごたごたとした多く

の想念の中から、抜け出るよう、今見て居れ、という一つの言葉だけが、火玉の
ように彼の身内に飛びあがつて来た。

秋風が立ち始めた或る日であつた。もう夜が明けた頃と思うのに何時までも外が明
かるくならないので、表の戸を開けてみると、今にも一雨来そうに空が暗かつた。南
風が冷たく顔を撫で、拭いたように南の空が覗いているので、雨にはならず間もなく
晴れると思つた。昨日、海員児童ホームと山手小学校との便所が溜つて流れるほどに
なつてゐるからと、市役所から喧しく云つて来て居つたので、今日はどうしても汲取
りに行かねばならない。実は、市指定になつてから、これまで指定汲取人がどうして
も長続きせず、投げ出しては代り、投げ出しては新たに指定人が出来していた事情が
次第にわかつて来て、この頃では彦太郎自身少々うんざりして居るのである。結局は
汲取請負賃が少額であるためであるが、時折、市役所に行く度に、衛生課長の杉山氏
に愚痴を述べ立ててみるのだが、気の毒だが予算がないので何ともならない、出来な
ければやめて貰う外はない、の一点張りで、埒が開かない。それはしかし無理ではあ
りませんか、実費にも満たない金額でどうして三十ヶ所もある市の建造物の汲取りが
出来ますか、と哀願するように云つても、杉山氏は、煙突のようにつぎつぎに煙草を
吹かし、しょぼしょぼした眼を眼鏡の中から光らせながら、汲取つた糞尿は田舎に売

りに行けば肥料になるではないか、それが相当の収入になる、引き合わぬことはない筈だ、いくら愚団愚団云つたところでどうにもならんと云つたらならんのだから、と最後には、焦立たしそうに卓を叩いて、文句があるなら市長に云いたまえ、と云うのであつた。まさか市長に云う訳にも行かず、その儘帰つて来るのだが、買収問題さえなかつたら、いつそ投げ出してしまいたい位なのである。最近、市に於ける諸事業の統制問題が着々として実行に移り、従来民間経営であつた色々の事業、たとえば渡船、海水浴場、電燈、等が逐次市営となり、最近では市内バス市営買収が行われた。こわれかかつた四台の旧式な自動車に依つて經營されていた市内バス会社は六万円で買収され、銀色に塗つた新しい乗合自動車に变つて、市内を通環した。糞尿汲取事業も早晚市営となるべき性質のものである、ということを彦太郎は考え、いよいよ相当の金額に依つて権利が買収される時こそ、今に見て居れ、と寝ても覚めても忘れない復讐の成就される時である、と思い、彼はその希望のために、生き生きと活氣づくのである。今までの苦労が決して無駄でなかつたと思い、その時のことを考え始めると、妙に胸がせまつて来て、涙のにじむ思いがするのであつた。最後の勝利を得るまで、少々うんざりはするけれども、難渋な市の汲取りをやつて行かねばならぬ、どんなことがあつても投げ出されぬ、と思うのだ。そう思いながら、三十ヶ所を越える市営建造物

の清掃を遅滞なく行うことはなかなか容易なことではなかつた。毎度、喧しく云われ通しあつた。看板には電話番号など麗々しく書きこんではいるが、実は二十間ばかり離れた諸式屋の電話であつて、そこの主人とは古い交際であつたが、その男は副業に保険の勧誘か何かやつて居るので、殆ど留守勝であり、きんきんと硝子をこするような声を出すおかみさんが、電話のかかるたびに門口に呼んでくれるのだが、初めのうちこそ、亭主と彦太郎の交際の関係もあり、又、たいていの買物はそこでするので、嫌な顔もせず知らせてくれたのだが、彼も留守が多いし、聞いておいて、帰つてから知らせに来てくれることが度々で、そのうえ、かかつて来る電話が、半分以上は、何故早く汲取りに来てくれぬか、とか、便所から溢れ出て臭くつて仕方がない、とか、いうような電話ばかりなので、この頃では、おかみさんは露骨に嫌な顔を見せ出し、海員児童ホームからかかつて来た、ことづけの電話を知らせに来てくれた時には、出がけに、電話のひとつ位取んなさいよ、と歯がゆそうに云つた。少し位の雨なら、海員児童ホームだけでも汲取つて置かねばならぬと思い、例の如く、彦太郎は一升徳利から湯呑茶碗に焼酎を注いで飲んだ。表の戸を開け、裏の水道傍に廻つて、米をといだ。釜を瓦斯にかけ、味噌汁をこしらえて、表に出た。唐人川の水が暗い空をうつし、泥構^{どぶ}のように淀んで流れている。板片や、草などを流している水面を見ていると、突

然、わつと、尻をつかれて危うく川の中に落ちそうになり、びっくりして振り返った。後に、十二三の、鼻を垂らした見たことのない少年が立っていた。何をするか、危ないじやないか、と彦太郎が云うと、小父さん、何か面白いお話をしてくれるよ、俺わざわざ聞きに来たんだ、と云つた。焼酎で赤くなつた顔に倏忽として満足げな微笑を浮かべ、彦太郎は、そうか、誰から聞いた、あんた、と訊ねた。小父さんはたいそう話が上手つて聞いたんだよ、話しておくれよ、と少年は馴々しく云つて、川辺の上にべたんと坐つたので、ああ、よいとも、と云つて彦太郎も草の上に腰を下し、足を伸ばした。なんのお話をしようかな、ああ、長久命の長助の話をしよう、昔、昔、あるところに一人の腕白小僧が居つた、ある日近所の子供と戦ごっこをしていたが、竹の棒で一人の子供の頭に、大きなん瘤こぶをこしらえた、いたいいたいと子供は泣き出した、子供のお父つあんが頭に湯気を立てて怒つて來た、そこで腕白小僧のお母さんが腕白小僧を呼びつけて、叱り出した、ところが腕白小僧は途方もない長い名前だつた、お母さんは叱り出した、これ、寿限無寿限無五光の摺りきれず海砂利水魚水魚末雲来末風来末食来寝るところに住むところや油小路藪小路ぱいぽぱいぽぱいぽのしゅうりん丸しゅうりん丸しゅうりん丸のぐうりんだいのぼんぼこぴいぼんぼこの長久命の長助や、お前はどうしてそんなに悪戯するかえ、人様の頭にたん瘤などこしらえるの

かえ、ほれ、この人の頭を見なさいとお母さんは云つて、打たれた子供の頭を見たところが、あんまり名前が長いので、名前を云つてしまわんうちに、瘤は引つこんでしまつて居つた、あはははは、面白いだろう。彦太郎は面白そうに笑つたが、少年は一向おかしくもなさそうな顔をして、今度は長久命の長助が井戸に落ちこんで、引つ張りあげて、医者を呼んで、お母さんが耳元に口を当て、長い名前を呼び出したら、医者が、まだお経は早よござると云つた、と云うのだろう、なんだ、そんな話、外のことはなんにも知らねんだろ、と少年は早口に喋舌つたかと思うと、いいツと歯をむき出して赤んべをし、呆気にとられて居る彦太郎を残して、一散に川岸に沿つて、上流の方へ駆け去つてしまつた。見えなくなるまで見送り、彦太郎はやつと我に返り、これはいつたい何事だらうと小首を傾げ、沸々と釜のふいている音を聞いて立ち上つた。狐につままれたようにトラック小屋の方に来ると、緑色のトラックの箱に、白黒チヨーハで何やら書いてあるのが眼に入った。あんなところに何にも書いてなかつた筈だと思い、近づいてみると、折釘のような曲つた片仮名が横につらねてあつた。

ノ ヒ ツ オ ツ ボ エ

子供までが自分を馬鹿にすると想い、瓦斯のところに来て釜の蓋をとつた。釜を下すと代りに味噌汁の鍋をかけ框に腰を下して、鉈豆煙管を取り出してきざみをつめながら、なるほど馬鹿のひとつおぼえかも知れぬと思うと、我ながらおかしくなつて来た。幼い頃、話し好きな母から色々な昔話をたくさん聞かされたが、その中で、不思議に、この長久命の長助の話だけが彼の記憶に残つた。との話はみんな忘れた、彼は誰でもがどうしても憶えきれないこの長い名前をよく暗記した。そこで、彼は人が彼を低能などと罵るがあつても、自分は決して頭が悪くないと自負した。彼は何時何処ででも、いくら酒に酔ついても、この長い名前を、一言一句の間違いもなく、何回でも繰り返すことが出来た。煙草の煙を輪に吹き、もういつべん長久命の長助の

名前を早口で云つてみて、それから飯を食べはじめた。

八時に運転手の沢田が来る筈になつていたのに、八時半になつても来る様子がなかつた。トラック小屋の裏に廻り、トタンの扉を叩いて、金本、居るかと、云うと、はあい、と睡そうな声がしたが、出て来る気配がないので、扉を開けると、李聖学は、立て膝で坐りこんだ女房とさし向かいで、朝鮮将棋をやつていた。飯台の上に筋を引いて、黒い駒をあつちに動かし、こつちに飛ばししている。まだ、出んのか、早う行つてくれねば困るじやないか、今日はどうしても山手小学校と海員児童ホームだけは取つておかねばいかん、もう出たかと思つて居つたに、どもならんじやないか、と不足がましく彦太郎が云うと、今日は雨ですから、ためてす、と振りむきもせず答えた。雨は降りはせん、いや、少し位降つても今日は是非取つとかにやいかん、すぐ出でくれ、とせき立てたが、返事もせず、悠然と左手で長鬚をしごき、立ち上る氣色もなかつた。むかついて来るのを抑え、なあ出てくれよ、と彦太郎が機嫌をとるように云うと、ようやく振り返つて、旦那さんたんな、わたしはこの仕事しごとやめようかと思うて居るです、と云つた。彦太郎はおどろいて、どうしたのだ、何かわけでもあるのか、と訊いた。別にわけということないですが、こんな汚い仕事しごとして、あんまりお金安いですから、と云い捨て、李聖学はまた将棋の方に眼をやつて、駒を一つ動かした。最近、世間は

多少景気を持ちなおして、人夫の不足を来す傾向を示し出したので、労働者は何處に行つても一日相当の賃銀になるのであつた。そういう意味のことが李聖学の態度に觀取された。今やめられて新たに雇い入れることは先ず至難であるので、彦太郎は狼狽した面持で、そんなことなら相談してくれたらよいじやないか、長年いつしょに仕事をして来て、今更やめるなどということは水臭い、そんなら賃銀を上げたら働いてくれるのだな、それは易いことだ、今日から三十銭増にしよう、と慌てたように云つた。李聖学は返事をしなかつたが、やがて将棋をかき集めて、竹筒の中に入れ、しぶしぶと、大儀そうに立ち上つた。仕事着に着換えはじめたので、彦太郎はようやく安心し、みんなにもそう云つて海員児童ホームの方から先に廻つてくれ、と念を押して、トラック小屋に帰つて來た。一般に労働賃銀が一日一円八十銭位になつてゐる折とて、止むを得ないとと思つた。不景気の折に一円三十銭で雇い入れた儘であり、人間も多少は入れかわつたが、最初は六人居つたが、收支が償わず、現在では四人居るのだが、一人だけ上げるわけには行かないから、四人共に上げるとすれば、一日一円二十銭の増額となり、休みの日を引いても、一ヶ月には三十円からの予算が狂つて來ることになる。現在でも算盤が持てず、月末計算には赤字のことが多いのに、これは大変なことになつたと思った。仕方がないから、不自由ではあるが一人断るより外はあるまいと

思つたりした。李聖学が表を通り、旦那さんたんな、行つて来ます、と云つて去つたあと、小屋の壁にかけた六角時計が九時を打つたのに、運転手はやつて来なかつた。彦太郎は角の諸式屋に来て、丁度主人が居つたので、店の自転車を借り、二町程離れた唐人川の上流の沢田の家に飛ばした。十分もすると、自転車に乗つた彦太郎が同じ道を引つ返して來た。彼は非常に不機嫌な顔をしていた。彼は沢田の給料を上げて來たのだ。みんな話し合いの上だつたと気がついたのだが、彼は自分の事業の崩壊することを何より恐れ、彼等の云い分を悉く入れたが、なに、今しばらくの辛抱だと思つた。自転車を返し、トラック小屋に帰つて來ると、焼酎をまた湯呑茶碗に一杯飲んだ。暗かつた空は次第に南の空から晴れて來て、外は明かるくなつた。しばらく茫然としたように坐つていると、すみませんでした、と声をかけて勢よく沢田がやつて來た。ああ、と彦太郎が放心したように答えると、なんだ、こりや、誰がこんないたずら書をしやがつたか、と、トラックの文字を読みかけたが、ふと声をひつこめ、くすりと笑つて、なに、エボオツトヒノカバ、と反対から読んで、なんのことか、子供が習字の稽古でもしたんだろう、仕様がない、と、口を尖らせ、一人でぶつぶつ云いながら、雑巾を濡らして拭いた。きれいに拭きとつてしまふと、急に、小森さん、ほんとうにすまんと思ひます、と細々とした口調で云つた。彦太郎がおどろいて沢田を見ると、沢田は

雑巾を擱んだまま、うつむき加減で、長い間お世話になつていて、今度のような無理を云いたくなかったけれども、私も子供が三人も居るし、近頃のような物価騰貴では、どうにもやつて行けなくなつたので、すまんと思いながら、あんなことを申しました、ありがとうございました、これから一生懸命に働いてお加勢をします、と云つた。彦太郎は沢田の何時にもないしんみりした口調に、なんとなく次第に胸が迫り、いや、いいんだよ、あんた、わしも、この頃のような物価騰貴では皆も困つて居るだらうから、あげてやらねばいけないと思つて居つた矢先だつたのだ、と心にもないことを云つた。沢田は運転手台に上ると、ぶるぶると、エンジンをかけ、トラックは老ぼれた車体をゆすぶり、青い煙を尻からはいて、小屋を出た。さあ、お乗んなさい、と沢田は彦太郎を促した。彦太郎はトラック小屋の戸を閉め、錠前を下し、運転手台に乗つた。昨夜電話があつて、何か用事があるそだだから、赤瀬の大将のところに寄つて下してくれ、と彦太郎は云つた。トラック小屋の前で一回転すると、若々しい緑のベンキで塗られたトラックはよたよたと車体をくねらせ、唐人川に沿うて疾走しあじめた。赤瀬春吉の家の前まで来ると、トラックを止め、彦太郎が下りると、海員児童ホームが先ですね、と沢田は訊いて、彦太郎が頷くと、トラックは青い煙を残して行つてしまつた。

お早うございます、と勝手口の方から入つて行くと、台所で胡瓜の皮をむいていた
でぶでぶの女中が、小森さん、今日はあんまり臭くないねえ、と云つて笑つた。冗談
云いなさんな、と彦太郎も笑つて、大将は、と訊いた。女中に教えられて離れ座敷の方へ庭伝いに行くと、赤瀬春吉は長々と寝そべつて居たが、彼の前にこちらに背を向けて洋服姿の一人の若い男が居た。やあ、御苦労さん、こっちお上り、と赤瀬はむつくりと起き上つた。いえ、ここで結構でござります、と縁に腰を下し、庭の方を見て、
たいそう鯉をお入れになりましたな、買われましたか、と訊いた。いやこの間、山の卯平が持つて來たのだ、なんでも山の池に食用蛙が居つたとかで、そいつを捕るために池を干したところが、食用蛙は居らんで、去年入れた鯉の子があんなに太つて沢山居つたそうだ、この間の大霖以来見かけないので下に流れて出てしまつたと思つてい
たんだが、流れずに居つたと見える。そう云つて、赤瀬は、おうい、と奥に向かつて声をかけ、今朝とつた上等の方の酒を熱くして持つておいで、と喰鳴つた。ところで、
小森君、今日来て貰つたのは外でもないが、今度、阿部を当分衛生舎の方の加勢をさせることにしたからよろしく頼む、と云うと、後むきになつていた男が、こちらを向いて、どうぞ、と挨拶した。へえ、どうぞ、と彦太郎も半信半疑ながら、頭を下げた。
三十四五の浅黒い顔に広い額が秀で、いかにも精悍な気が眉宇にあふれていた。何処

かで見たような顔だと思つたが、思い出せなかつた。阿部は、と赤瀬は語を継いで、四五年満州の方に行つて相当やつて居つたのだが、去年、家内に死に別れてから、日本が恋しくなり、帰つて來たのだ、と説明したが、それで、彦太郎は、この人が赤瀬の三番目の娘さんの婿だつたと思つた。去年の春、娘が死んだと云つて赤瀬が満州に行く時、僅かながら、心ばかりの香典を包んでことづけたことがあつた。阿部も、と、なおも赤瀬はつづけて、新京に店を持つていたけれども、友達のしつかりしたのに管理を依頼し、こちらにその店の出張所を設けて、やつてゐるのだが、幸い、余暇もあるし、今度、衛生舎も市指定になつたし、買収問題もあるし、会計その他も今のようなやりっぱなしでは困るし、何かと君の相談相手にしてくれたらよいと思う、と結んだ。阿部が東京の大学まで行つたということを聞いて居つたし、彦太郎も非常に心強く思つて、へえ、そうして貰えれば私も大助かりです、どうぞ、よろしくお願ひいたします、と叮嚀に頭を下げた。阿部も一寸会釈し、こつちはなんにも解らんのだから、指導して貰わにやならん、と云つて笑つた。いえ、あんた、すぐ解りますよ、と彦太郎は自分が居れば大丈夫だというように胸を反らせて答えた。そこへ、赤瀬の奥さんが盆の上に徳利と盃をのせて入つて來た。どうかな、小森さん、商売は都合よういつて居るかな、と笑い笑い云つた。それから酒になり、気さくな奥さんの上手な

洒落に打ち興じ、阿部の満州に於ける苦闘談、赤瀬の政治談、彦太郎の、外に云うこともないので、商売のむずかしさに対する愚痴、など、賑やかに笑い興じ、商売もあらうに糞の仕事のために家屋敷や田地田畠まで無くしてしまって、これがほんとの糞馬鹿じやな、と奥さんが云うのに、みんな大声を立てて笑つた。飯を食べて行きなさい、と云われ、初めて昼になつたことに気がついた。昼飯を馳走になり、彦太郎は阿部といつしょに赤瀬の家を出た。

近づきに一杯、と阿部が云うのを、もとより好きな酒、いやである筈がなく、阿部について行くと、タクシーを拾つて、千成というこの市の一流の料亭の玄関に乗りつけた。こんな服装では上れんから、どこか安直なところでと、彦太郎が恐縮するのを、なに、かまうことはない、上りたまえ、と先に立つてどんどん階段を上つた。彦太郎も草履をぬぎ、ついて上つた。色の白い丸ぼちやの仲居が来て、まあ、ああさん、昼の日中から何事、酒？ビール？と訊いた。酒がよい、飯を食つて來たから、何か簡単なものでよい、それから、あれを、と云いかけるのに、はいはい、おやすくないのね、あとでうんとおごらせるぞ、と仲居は心得顔に出て行つた。部屋の西側に佐原山が見え、頂上の松林を包みこむように白雲が流れていた。空は深く澄んで、すっかり秋の氣配であつた。赤瀬の家で相当飲んで居つたので、二人とも、赤い顔をして、声も大

きく、大いにやろう、はあ、大いに、大いに、と盛んにとりとめもない気焰をあげた。彦太郎はすっかり阿部に親しみを感じ、洋々と前途がひらけて来たような頼もしさを感じた。酒が来ると、さかんに応酬し、小森君、金のことなら心配したもうな、あつちの銀行は僕の電報一本で、何万円でも即座に送つて来る。というのは法螺だが、少々はあるから、その方の相談なら僕してくれたまえ、と阿部がいうのに、ひょつくり、自動車のタイヤを換えなければならなくなつてゐるのを思い出し、相談してみようかと思つたが、今日会つたばかりで、何がなんでも厚かましいと思い、日を改めることにして、今日は非常に愉快です、あんた、と嬉しそうに云つた。そこへ、おおきに、という女の声がし、銀杏返しに結つた細面の背の高い芸者が入つて來た。誰かと思つたらああさん、どうしたの、昼の日中から、と急に馴々しく態度をくずして、阿部の横に坐つた。馬鹿、昼も夜もあるか、さあ、注げ、注げ、今日はわがうんこ会社のために大宴会を張るのだ、と阿部は黄色い声をあげ、小森君、僕は八年前からこの女子に惚れて居るのじや、というのは嘘じや、などと燥いだ。あつちでの奮闘談をまた繰返し、彦太郎も、だんだん打ち寬いで来て、しまいにはなかなか雄弁になり、いい気になつて、喋舌りだした。この商売をしていると、変な人の秘密がわかつたりして、中々面白いですよ、私なんか、どこを歩いても、便所ばかりが眼についていけません、

大体便所の汲取口というのもも千差万様で、みんな特徴がありますよ、然し、そこの主人の心遣いが汲取口まで及んでいるというのはあんまりないですな、時々、非常に氣を遣つたらしい汲取口に出合うと、その主人がほんとに床しい人に思えます、実際またそこまで氣のつくような人は偉い方が多いようです、表玄関はぴかぴかと磨き立ててある癖に、裏側の方は出鱈目で、便所なんかやりっぱなしの家など、どんなに髪を生やした紳士でも、なんとなく軽蔑したい氣が起りますよ、便所の中にいろんなものが落ちているのが面白いですよ、女のある家に赤い紙が落ちていたり、赤く染つていたりするのは当然のことですが、よく便所の中にサックが棄ててあるところがあります、料理屋や遊廓なんぞはあり勝なことですが、普通の家にあるのは、産児制限をやつて居る証拠ですな、いろんな手紙とか、へんな妙なものが棄ててあるのですが、便所の中へ棄ててさえおけば、誰も知らないと思つて居るのが面白いです、また汲取りに行くと、丁度、誰かが用便所で、空気抜きに下の方に硝子戸があつたりするようなところで、戸があいて居つて白い女の足が見えたり、と、酔いの廻つた彦太郎がべらべら喋舌りつづけるのを、阿部がとつて、わあ、これは聞き捨てならぬぞ、痴漢小森彦太郎便所を覗くの図か、君はそいつを見ようと思つてこの商売をして居るんだろう、と云えば、氣味が悪いわね、と女もほんとうに氣味の悪そうな顔をした。辻

り出したように止度のなくなつた彦太郎は、なおもはずんだような口調で、この間こんなことがありました、去年のことです、まあ聞いて下さい、別に特別に覗くわけではないのですが、偶然そういう場合に出来つて眼に入るわけです、その時は夕暮近くなので薄暗かつたのですが、しゃあという音がし、じやぼじやぼとこぼれる音がどうも小便の音と違うので、不思議に思つて見ると、ホースの先が見え、水道の水をどんどん出して、しきりにあそこを洗つてゐるのです、私は、おどろきましたな。ほんやりしていると、しばらく町疇に洗つてから、いやだいやだ、という声がし、女は便所から出たのです、連れて行つた人夫に汲取りを云いつけておいて、表に廻りました。

この家に来たのは初めてで、ここは二ヶ月ばかり前、人夫が隣を汲取りに來た時に、私の家もこれから取りに来てくれと頼まれたとかで、私は二ヶ月分の料金を貰つて帰ろうと思つたのです、今の女はどんな女だろうという興味もあつたわけでしたが、表は小粋な構えで格子戸を開けて、今日は、と喰鳴りました、玄関に畳表のついた下駄があるので、夫婦暮しかな、と思いましたが、やがて奥の障子が開いた音がし、すぐには、玄関の障子が開きましたが、私はそこに茫然と立ち竦んでしまつたのです、阿部さん、私は正直者で作り事はなんにも云えないのですが、これは小説のようで、夢ではないかと思いました。私は昔相當にやつて居つた時分に、酒が好きで、女もきらい

ではなく、そのためにもありもせぬ身代をなくしましたが、その頃ひとりの芸者を引かして、世話ををして居つたことがあります、その女は、私が次第にこの衛生舎のために左前になつて来ると、しきりに素気なくし出したので、私もあつさり諦めて別れたのです、私の前に現われた女というのが、その女であります、向こうも、何とか、小さい声で、驚きの声をあげたようでした、別れてから十年の上にもなるので、その頃とは非常に変つて居りましたが、どことなく昔のままの仇っぽさが抜けず、若々しく見えました、ああ、自分が先刻便所で見たのはこの女だったのかと、私は異様な感懷に打たれ、この女は何時結婚したのだろう、と思い、久しぶりだな、とだけ云いました、女は髪をみだし、長襦袢の上に慌てて着物を引っかけて帯をしめたらしく、今まで床の中に居つて男と寝ていたらしい、久しぶりだなど、一言、私がそういうと、女も、久しぶりね、と云つて、何か用?と訊ねました、相かわらずこの商売をやつているのでね、集金に來たんだよ、と私が云いますと、そうと女は引っ込みましたが、障子の隙間から、蒲団が見え、誰かの寝ているのが見えましたが、蒲団がふくれているだけで、顔は見えませんでした、女が出て来て、これでいいの、と云つて、一円私の掌の上にのせましたが、女の手が私の手にさわった刹那、私は何故かぞうんとしました、表に出て、隣りの駄菓子屋に入つてラムネを一本のみ、そこのおかみさんにお聞

いてみますと、女は結婚したのではなく、囮われているのだということでした、男と
いうのは何處かの米屋の主人らしく、五十四五の頭の禿げた親父で、五日に一度位ず
つ泊つて帰ると、おかみさんは話しました、私は未だに妾暮しをしている照葉が、そ
の女は照葉という名前でした、なんとなく可哀そうになりましたが、私がこんな商売
であるばかりに見た女の秘密がわかり、いやな気がいたしました、と、彦太郎は話の
中頃から回顧的な調子になり、妙にしんみりとして來たが、話して居るうちに、なん
となしに胸が迫つて来て、涙が出そうになつて来て、どうにも仕方がなく、ごまかす
ように何度も手で眼をこすつた。いいお話ね、と芸者も釣りこまれたように、同じ境
涯を辿りつつあるものの共感を持つたのであろうか、撫然たる表情をしてためいきを
つくよう云つた。なんだ、馬鹿にしんみりしてしまつたじやないか、痴漢の便所覗
きが新派悲劇になろうとは思わなかつた、酔が醒めてしまふじやないか、飲みなおし
だ、と阿部は大声をあげたが、ほんとうだ、あんた大いに飲みましよう、と彦太郎も
もう人の好さそうな笑い顔に返つて、ひとつうたいましょうかな、と云つたので、芸
者が三味線を取りに立つて行つた。三味線が来ると、めいめいうたい出したが阿部が
女に三味線を弾かせて、岸の柳を頼りない節まわしでうたうのを聞いているうちに、
あまり長いので、横になつた彦太郎はいつの間にか眠つてしまつた。眼を覚ました時

には誰も居ず、既に傾いた西日が佐原山の松のすぐ上に引っかかつたように赤く燃えていて、まともに座敷に射しこんでいた。

このことがあつてから、彦太郎にとつて阿部は頼もしい相談相手となつた。唯一の身代であるトラックも長年の使用のため、老朽し、車体検査の度に喧しく云われていたが、修繕代が廻らぬため修繕も延し延しして居つたのを、阿部の好意に依つて、タイヤも換え、傷んでいる所はすつかり修理して、車体は見違えるほど堅牢になつた。木が腐り、糞尿が洩つていた桶も早速六十荷新調した。阿部の知り合である関係で、商店会社工場などの相当まとまつた金額を貰える新しい得意も殖えた。今まで集金のうちから、毎日の焼酎代を捻り出して、時折りには、赤瀬から皮肉も云われたりして居つたが、この頃では、焼酎代として阿部が彦太郎のために差引いておいてくれるのでは、何の気兼ねもなしに、好きな酒が飲めるようになつた。阿部は彦太郎のために、市へ提出する歎願書の原稿を作つてくれ、赤瀬の意見で、それを謄写版刷りにして、数十通拵らえ、市会議員を初め、有力者へ配布した。これまでには、彦太郎が市役所に行く度に、衛生課長の杉山氏をとらえ、煮えたとも焼けたともつかぬ愚痴をならべるばかりで、しまいには喧嘩別れみたいになるのが落ちで、さっぱり埒があかず、赤瀬春吉も、民政党の奴どもが反対しているのだから、一遍正式に願書を拵らえて一般の

輿論に訴えてみるがよい、などとは云うものの、その願書を作るのを面倒くさがつていたのだが、気さくな阿部は、小森から色々と実情を訊きただし、赤瀬からも意見を聴取して、早速歎願書を作製してくれた。——謹んで御歎願申し上げる。わが衛生舎は本年初め市指定となつて以来、今日まで、指定箇所の糞尿汲取に誠心誠意従事して来たけれども、成績はなはだ面白からず、再三、市当局に折衝したが、何分予算がないの一点張で、如何ともし難く、と云つて一日も棄ておけない問題なので、ここに一文を草し、賢明なる諸賢の深き御理解に訴える次第である。御承知の如く、市有便所糞尿汲取人請負賃は市歳出経常部第十二款汚物掃除費の中に含まれて居るのであつて、年額六百円、一ヶ月五十円の予算である。汲取を命令されているのは、小学校六、共同便所五、市役所、職業紹介所、(と、市建造物を列記し)以上の三十二箇所である。以上の中、小学校が一番多く、一ヶ月にトラックで六十台を要し、他は全部で三十台、合計九十台を以て、ようやく全部の清掃が完了されるわけである。これに要する費用を摘要すると、距離その他の関係で多少の相違はあるが、先ず一台一回について、人夫賃、運転手、ガソリン代、其他雜費諸掛りを計算して、最小限度、一円五十銭の実費を要する。即ち、九十台で一ヶ月少くとも百三十五円を必要とするわけである。すると、汲取った糞尿は肥料として収入があるということであるが、小学校を初

め、海員児童ホーム、その他の大半は肥料として役立たぬため、汲み棄てるばかりで、九十台のうち、先ず肥料として農村に売るることの出来るのは、三十台にも満たない。これを、一荷十錢として、一台が二十荷積みであるから、二円、三十台で六十円となるが、トラック一回の費用が前述の如く、一台一回一円五十錢、三十回で四十五円かかる訳であるから、結局十五円というものしか収入になつて来ないのである。試みに、同じ、汚物掃除費に含まれている汚物搬出馬車人夫請負賃を調べてみると、一ヶ年一万五千六百十七円、清潔法施行に依る特別支出、即ち年二回の大掃除の費用、一千四百二十円、合計一万七千三十七円であつて、現在馬車十九輛であるから、一輛に付、年八百九十六円七十錢、一ヶ月七十四円七十二錢ということになる。これを糞尿汲取賃に比較すると、一ヶ月五十円というのは、馬車一輛代にも及ばないのである。仕事の性質を比較する時には、その困難なことは、塵芥取りの比ではないのである。同じ汚物掃除でありながら、どうしてかくも多額の差があるかということについては識者の判断に俟ちたい。かかる衛生上の大問題が、政党政派の党略に依つて左右されるということは、一大社会問題である。人道上の問題である。この地方に牢固たる勢力を有している一政党に所属して居るがために優遇され、他はそれに属さないがために冷遇されるということは、かかる種類の問題に於ては絶対に許されざることである。社

会正義の立場から、識者の輿論に訴える次第である。わが衛生舎は市指定となつて以来、衛生上の大問題に関する仕事であるため、誠心誠意、多大の犠牲を払つて來た。既に千円を突破する損失にも耐えて來たが、今日では、も早、万策尽きた形である。今まで市役所が喧しく云うのには唯々として従つて來たけれども、これからは、欠損ばかりでは継続が出來ないから、一ヶ月支給される五十円だけの仕事をして行くより方法がない。これからは怠り勝になつて、少々は糞尿の堆積する箇所が出来るかも知れないけれども、容赦していただくなつてある。以上の実情を調査下され、善処ありたい。——という意味の歎願書であつた。これに彦太郎は、午前中をつぶして、町噂に一々署名し、捺印した。郵便で発送してしまふと、写しに残した歎願書をもう一度読み返し、にこにことうなづき阿部さんはなかなか学者であると感心した。

この歎願書は端なくも各方面に多大の反響を捲き起し、いろんな問題を惹き起した。政党的に何等の関係のない人達は、時折、直接彦太郎から愚痴を聞かされて同情していた小学校長を初めとして、市当局の片手落を詰問した。反対派の新聞は、人道を無視する民政党の横暴、というような見出しで、麗々しく書き立てた。警察からも市に事情の調査に衛生部長がやつて來た。問題が問題だけに、一般の輿論のごとく、一政党の勢力下に身動きも出来ぬ卑屈無力なる市当局への批難が湧き上つて來た。民政党

は早速幹部会を開いた。市は歎願書を受け取った四日目に、緊急市参事会を召集した。議案として糞尿汲取人夫請負賃増額の件が日程に上され、杉山衛生課長の説明があつた後、討議に入つた。友田喜造と赤瀬春吉の顔は見えなかつた。これは何等かの政治的に利用されたのである、我々は反対党の策動に乗る必要はない、増額は無用だ、という者もあつたが、結局、問題の性質上、飽く迄も反対だということは押し通せなかつた。既に、市衛生課として実情の調査報告が附加してあることであり、現在の儘で、小学校を初め市建造物に、糞尿堆積するということは、何と云つても由々しき問題であつた。衛生舎の指定を取り消すがよいと云う意見も出たが、契約期間が一ヶ年となつて居り、特別に落度もないし、また、誰がやるにしても結局は同じことなので、その意見は、民政党の参事会が主張したけれども、通過しなかつた。結局、種々、議論のあつた末、次の予算市会で決定額を定めることとし、取り敢えず予備費のうちから補充し、年千五百六十円ということで決定した。月百三十円である。尚、市当局案としては、指定人に損害を与えるということは出来ないから、指定になつた月まで遡つて支給したいと申し出でたが、先刻から、止むを得ず、千五百六十円は承認したもの、忿懣やるかたなく思つていた民政党の参事会員は、この時とばかり口を揃えて反対を唱えた。結局、本月より支給、ということになり、散会した。翌日、彦太郎は市

役所に呼び出され、杉山衛生課長から、その云い渡しを受けた。書類に彼が印を捺すと、杉山氏は、しょぼしょぼした眼をロイド眼鏡の下から覗かせ、色々苦労をかけたが、昨日の市参事会で取り敢えずこういうことに決つた、まだ不服かも知れないが、次の予算市会までこの程度で頑張つてくれたまえ、悪いようにはせんつもりだ、ここまで漕ぎつけるには、僕もなかなか骨を折つたよ、と煙草をしきりに輪に吹きながら云つた。ありがとうございました、あんた、なんの不服があるもんですか、これまでして貰えればいくらか助かります、いろいろお骨折りありがとうございましたと、嬉しさがつつみきれず、にこにこして、何度もお礼を云つた。しかし、小森君、ひとこと釈明しておきたいことがある、それは市役所が民政党のために牛耳られていると君達が考へていて、このことは榮譽ある市役所のために声を高くして弁じたい、市は市としての独自の建前があり、市民全般の福利、市 자체の發展、の外、決して他意ない、政党のことなんか問題にはしていないのだ、このことをはつきりと理解して、君達の誤解をといて貰いたい、と杉山氏は云つた。よく、わかりました、ありがとうございました、と彦太郎が書類を握つて出口の硝子戸のところまで来ると、ああ、小森君、一寸待ちたまえ、と杉山氏が慌てたように呼びとめた。引つ返すと、しょぼしょぼの眼をいつそう細めながら、今僕が云つたことわかつてくれたのだろう、

と念を押すので、彦太郎は、へえ、よくわかりましたとも、と強く頷くと、今僕の云つたこと、君の胸の中だけにしまつておいてくれたまえ、あんまり発表してくれん方がよい、と臆病そうにつけ加えた。意味がよく受けとれなかつたが、よろしゅうございます、あんた、と答え、きっとだよ、とまだ念を押すのに、私も男ですよ、受合つたら何も云いませんとも、と、何故、これ位のことを行なにしつこく口止めするのだろうと考えながらも、はつきりと声明した。帰りに阿部の家に寄り、市役所からの新契約書を阿部に見せると、阿部はいかにも我意を得たりというように腹をゆすつて哄笑した。いや大成功、大成功、こうまでうまく運ぼうとは思わなかつた、月百三十円貰えば先ず悠々たるものであろう、あれには一ヶ月百三十五円の実費と書いておいたが、あの歎願書の数字のからくりが連中にはわからんと見えるな、市役所の人達は年から年中数字と統計の垣の中にあるので、ほんとうの数字の魔術に不感症になつてゐるし、市参事会員などの他の連中はてんから数字など知りはしないのだ、これは愉快愉快、祝盃をあげよう、と阿部は広い額を叩き、上機嫌で云つた。彦太郎ももとより上機嫌で、なにもかもがこれからは都合よく行くぞと思ひ、前途に対する希望で明るい気持になるのであつた。

或る朝、彦太郎が角の諸式屋に来て、酒の肴に蟹の罐詰を買い、蓋を切つて貰つて

いると背後から、小森君、と声をかける者があつた。振り返ると、鳥打帽を被つた洋服姿の男がくるくるステッキを廻しながら立つていた。誰か一寸思いあたらなかつたが、やつと、民政党的新聞記者であることを思い出し、表に出ると、その男は、一寸顔を貸して貰いたいが、と云つて歩き出したので、彦太郎もついて行くと、唐人川の岸辺の柳の木の下まで来て立ちどまり、こちらを向いた。狡猾な眼附だと思い、なにか用ですか、と彦太郎は訊いた。早速だが、と新聞記者は脣のない顎を捻りながら、先達、君の提出した歎願書は誰が書いたのか聞かして欲しいのだ、と云つた。私との主任が書きました、と躊躇せずに答えたが、云つてよかつたかなとすぐ後で思つた。主任？と腑に落ちかねた表情で、主任というのは誰のことか、と訊き返した。阿部さんのことですたい、と答えると、阿部？阿部？と繰り返し、思い出せぬ風であつたが、ははあ、西部運送の阿部丑之助だな、そうだろう、とやつと思ひあたつた様子で、そうです、と彦太郎が答えると、あの阿部が君の衛生舎の主任か、と怪訝そうな顔をし、待てよ、とまた考へ、あれはたしか赤瀬春吉の娘婿だった筈だ、それでわかつた、なるほど、なるほど、となにやらしきりにひとり頷いて、小森君、だいたい君は考へ違ひをして居りはせんか、と見据えるように云つた。なにがですか、あんた。なにがと聞き返すまでもないことではないか、自分の胸に問えばわかる筈だ、君は村では生え

抜きの民政党で、友田さんなどにも相当お世話になつてゐる筈だ、それに今頃になつて寝返りをうつて、赤瀬の児分になるなどということは、少し義理を外れていいないか。新聞記者は早口にそれだけ云つて彦太郎の返事を待つた。以前はなるほど私も民政党でありました、親父がそうであつたからです、選挙などの時分には私も相当民政党的ためには働きました、尽せるだけは尽して居りますよ、どちらかというと私も政治気違いであつたし、党のためにも少なからぬ私財も投じて来ました、ところが、私が十四五年前にこの事業を思い立つた時にも、民政党の人達は一向援助してくれる風もなく、口では親切そうに云いながら、実際の助力は誰一人してくれなかつた、私は独力でこの事業を守らねばならなかつた、苦心の甲斐もなく、その後、私がこの事業に失敗を重ねた時にも、ただの一人も声をかけてくれる者もなかつた、それでも選挙などには随分政党のために尽したものです、トラックが抵当に何度もなつた時にでも、民政党の人達は誰一人金を貸してくれる人もなかつた、それでも、私はこの五月の選挙には、友田さんから、村の票や、漁業組合の票を買収してくれるよう頼まれた時にも、随分と危ない橋を渡つて買収や訪問をして歩いたものです、町の方に出て来れば私を馬鹿扱いにし、屑のように皆云いますが、これでも田舎に帰れば、小森さんと云つて少々は人が立ててくれます、何度も巡回さんに捕まえられ、訊問されましたが、

その都度うまく云い逃れました、友田さんのためにきわどい芸当も随分とやつたもので、大方臭い飯を食うところだつたのです、その後、選挙がすんで間もなく、又トラックが無尽会社からの借金のため抵当に取られたので、友田さんのところに頼みに行きました、ところが、一向受附けてくれず、けんもほろで、五度も六度も足を運びましたが、結局無駄で、しまいには玄関払いをされました、私は途方に暮れ、帰る途中、以前から知り合であつた赤瀬さんのところに寄つて、保険料の延滞について色々お聞きし、期間のきれた私の保険を復活して貰うように手続をたのみ、何気なしに、トラックのこと話をしたのです、赤瀬さんはお留守でしたが、奥さんが非常に同情して下さつて、思いがけず、お金を融通して下さつたのです、その後も色々と世話になりました、赤瀬さんは全く私の事業にとつては大恩人なのです、一体この町で、政友会とか民政党とか云つても、誰も、その党の政党の政策がどうのこうのということは知りもせず、聞いてもわからない人が多いのです、それにもかかわらず、その政党に属して居るということは、自分の生活や商売にとつて利益があればこそ、入つているだけのことです、私は政友会の政策がどんなものか、民政党がどんなものか、なんにも知らない、市会議員に出て居る人達だつて本当に知つているものはあんまりないと思う。ただ、私にとつては事業が生命だ、私の事業を助けてくれれば政党も有難いけれども、

私は政党なんかにはもう愛想がつきた、政党とかなんとかそんなことは糞くらえだ、と次第に彦太郎は興奮して来て、喰つてかかるような姿勢になつた。皮肉な表情を湛えて聞いていた新聞記者は、よろしい、わかつた、帰つて君のいったことを友田氏に伝える、と投げ捨てるように云つた。それを聞くと、途端に、彦太郎は愕然と我に返つたように、慌てて、いや、友田さんに云つた訳ではないです、あんた、と急に哀願するような口調になり、友田さんに云わんでもよいことではないですか、と煮え切らぬことを呟いた。いや、よろしい、帰つて友田氏に、君が糞くらえと云つたとお伝えする、と足元を見透したように新聞記者は笠にかかり、思わせ振りして立ち去ろうとした。彦太郎は必死の如く追いすがり、何もそうむきにならんでもよいではないですか、一寸待つて下さい、と云ううちにも、彼は友田の憤怒によつていかなる事態が起るかを想像し、友田が暴力に訴えるのは必定と思い、十数人の子分が彼のトラック小屋を襲撃して、トラックはもとより、小屋までも滅茶滅茶に破壊し去つてゐる光景がさまざまと脳裡に浮んだ。彼は狼狽した様子でポケットから十円紙幣を一枚掘み出し、相手の手に押しこんだ。そうして、どうぞ、内密に、と、事業を守るために如何なる卑屈も甘受する態度で、ぺこぺこと頭を下げた。ふふん、と鼻で笑い、下唇をべろりと舐め、そういう事がわかれば何も事を荒立てはせん、と無造作に菓口を出して十円紙

幣を入れ、顎を捻りながら、大きにお邪魔した、友田氏には何にも云わないから安心したまえ、と云い捨て、すたすたと行つてしまつた。先ずよかつたと彦太郎は安心すると同時に、とりとめのない自分の行動が情なく悲しまれた。だが、どんなに卑屈でも、恰好が悪くとも、たとい、地面に頭をすりつけようとも、事業さえ失わねばかまわないのだ、と思つた。

昼を少し廻つた頃、公会堂と職業紹介所と教員住宅の汲取りに廻つて居たトラックが帰つて來た。運転手の沢田は框に腰を下して、弁当を開いたが、口の中に飯をふくみ、日頃から尖つた口を余計尖らせて、もぐもぐと、小森さん今日公会堂で矢橋村の皆田に会いましたよ、公会堂で何かの寄りがあつて居る様子でしたが、私がトラックをとめると、その音を聞きつけたらしく、出て来て、帰つて小森君に云つてくれといつて、今後は絶対に唐人川尻に糞尿を棄てて貰つては困る、と云いました、何かしら、たいそう偉そうにして居りましたよ、と云つた。従来汲取つた糞尿は三通りに処理されていて、第一は市の周囲にある農村に肥料として売り捌くこと。相当広範囲にわたる農村から相当の需要があり、殊に最近荒蕪地を開発した佐原山頂附近一帯の市有開墾地もよい得意であつた。これまでには百姓が個人的に牛車を曳いて町の方に糞尿汲取りに出る者も多かつたが、最近では、トラックで運んで来る衛生舎の肥料を買う方が

便利でもあり、却つて割安であつたりするので、大抵衛生舎の得意になつてゐた。第二には特別構造の糞尿船に積み込み、海を隔てた対岸の地方へ運送し売却すること。糞尿船は一隻しかなく、一度満船して出ると、売り捌いて帰つて来るまで三日も四日もかかり、経費の収入が補わないことが多かつた。この船はもと給水船であつたのを古くなつたので、持主から借り船していたのであつたが、最近では肥料の値上りと、対岸地方でも自給的に方法を講じ始めたのとで、ますます不成績となり、近ごろでは沖合へ漕ぎ出して行つて玄海灘に棄てて来ることの方が多くなつた。ところが老いぼれた船頭の狡いのが乗つて居つて、あんまり沖合まで漕いで行かず、いい加減のところで流してしまつたり、甚だしい時には、海滨に繫いだまま、夜のうちに栓を抜いて流しておいて、抗議を持ちこまれると、栓がゆるかつたのでひとりで抜けたのだろう、少しも気がつかなかつた、と云つて弁解したりするようなことがよくあつた。いずれにしろ、従来の行きがかり上、使用しているだけであつて、海滨まで桶を運び、また、船の中に入れ、しかもあまり多量には入らず、不便この上もなかつた。第三には、唐人川尻、並に、各所に穴を掘つて蓄置すること。農村の方にも、佐原山頂附近にも幾つも穴を掘つてセメントで堅め、糞尿を蓄めた。然し、農村方面には肥料として役立つもののみを蓄え、小学校其の他肥料として用をなさないものは、船に積んで棄てる

か、唐人川尻と笹倉山とに掘つた穴に棄てた。然し、笹倉山の谷は相当の距離があるため、主として唐人川尻に棄てることが多かつた。これも市当局の諒解の上であつて、市としては、衛生舎を指定すると同時に、笹倉山の麓に浄化装置を有する市立汲棄場を作ることを立案したのであるが、未だに実現しないで居るのである。既に予算はとつてあるので、早晚着工する筈になつてゐる。唐人川尻の汲棄場は、恰も、塵芥取り部落の外れであつて、さなきだに、各種の紛擾の絶え間のない両者の間に、また一つの紛擾の種を蒔いたようなものであつたが、外に適当な場所もなく、浄化装置の市立汲棄場が間もなく出来ることになつて居り、それまでということで、現在もなお、そのままになつてゐるのであつた。今まで何度も何度となく棄てないでくれとドノゴオ・トンカから申し出はあつたのであるが、なるだけ棄てないようにするからと云いながら、どうしても便利であるため、やつぱり殆どこの唐人川尻を利用するのであつた。然し、今、沢田が口をもぐもぐさせながら、皆田老人がそう云つたといい、なにかしら、偉そうな風であつたということは、最近の歎願書問題を繞つて、何時もとは違つたものが感じられた。彦太郎は沢田の云つた、皆田老人の偉そうな様子というのがまざまざと眼に浮ぶように思い、これは少し警戒しなければならぬと思つた。三時頃から、角の諸式屋の自転車を借りて山に上り、途中の傾斜の甚だしいところは自転車を押して

上つた。秋風が芋の葉を動かしてはいたが、太陽はぎらぎらと背中に照りつけ、汗が淋漓と流れた。^{いちじく}無花果の実がすっかり大きな赤い口を開き、柿がいくつも青い玉になつて光っていた。坂道を汗だくになつて登つて行くと、向こうから背に薪を負つた女が下りて來た。行きすり合うまで誰かわからなかつたが、すれちがいさま、小森さんでないですかや、と向こうから声をかけた。びっくりしたように顔をあげると、暑いですな、商売忙しいでしょ、と女は大きな眼をくりくりさせて云つた。それは卯平の女房であつた。彦太郎は一瞬ぎよつとして卯平の女房の顔を見つめたが、いつか山の池の傍で見た時のような気違ひじみた凄さはなく、にこにこしているので、もう狐は落ちたのだろうとようやく合点が行き、あんた、なおりましたかな、と訊いた。はあ、と女房は急に面映ゆそうに眼を伏せ、顔を赤めて、あの時はいろいろお世話になりました、恥しゅうて、よう人に顔が合わされん、と遠慮したような笑い方をし、うちのは居りましたよ、大根の種を蒔きよりましたから、上の畑に上つてみて下さい、と云つて、すたすたと坂道を下つてしまつた。薪に半分以上隠れた後姿眺めながら、たいそう瘦せたと思い、いつかのように田舎に残したままの女房と子供を思いだした。あいつたちにも随分と苦労をかけたが、いよいよ自分の最後の勝利もそう遠いことではない、近き将来には必ず笑つて手をとりえることがあるのだ、と彦太郎はその待

たれる日のことで胸がいっぱいになり、もう少しだ、ああ、もう少しだよ、と誰にい
うともなく呟き、自転車を押して、汗に濡れながら、なおも山道を上つて行つた。今
日は卯平に会い、市有開墾地の農作組合で必要な肥料のことを聞くためにやつて來た
のである。ようやく頂上の道まで出ると、上方の畠で卯平はしきりに畝をおこして
いた。下から声をかけると、上方で手をあげ、鍬をかついで、斜面を駆け下つて來
た。暑いなあ、秋になつてだいぶになるのに、今年は妙に涼しゆうならん、暑い、暑
い、と卯平はしきりに暑がり、道端の小屋の蔭に入つた。彦太郎も自転車をおいて入
り、腰から鉛豆煙管を抜いた。それから卯平のいう農作組合の肥料の量を鉛筆をねぶ
りねぶり、帳面に控えた。話のはずみに今日運転手から聞いた話をすると、卯平は自
分のことのようふんふん腹を立て出し、皆田の老いぼれが何をぬかすか、市で承知
して居るもの勝手にやめろとかなんとか気の利いたことをほざくな、俺に云うて來
い、いつでも俺がやつけてやる、と、矢橋村の方角を睨んだ。ありがとう、あんた、
と彦太郎は答え、この口ばかり達者の男の好意を嬉しいと感じた。実際はたいして何
の役にも立たない卯平であることが判つて居つたが、心から自分のことのように同情
して憤慨する男を何かしら頼もしげにも感じた。えらい汗かいて居るじやないか、帰
りに扇谷温泉にでも寄つて汗を流して行つたらどうだ、この頃風呂も綺麗になつたそ

うだし、それに仲居にたいそう別嬪が居るそうじや、と卯平が笑い笑い云つた。ああそれもええなあ、あんた、この頃何やかやでごてごてし、ゆつくり風呂を浴びるといふこともない、今日はもう別に用もなし、温泉にでも浸つて来ようか、だが別嬪なんか、そんなものはどうでもよいぞ、と彦太郎が答えると、どうでもよいことはあるまい、彦さんも昔はなかなかやつたもんだからな、と云つて卯平は彦太郎の肩をとんとつき、大声を立てて笑つた。彦太郎もにやにやと笑い、昔は昔たい、糞の苦勞で女なんぞのこと忘れてしまつた、女の欲しい位の馬力がある時でないといかんな、と云つて、二人は顔見合させ、お互様になというように哄笑した、然し、彦さん、根が好きな道、その温泉の女というのは、とてもよい女というから、彦さん、気をつけたがよいぞ、と笑いながら云うのに、ほんとにな、あんた、気をつけんと危ない危ない、と彦太郎も笑いながら答え、肥料は明後日間違いなしに全部届けるからと自転車に乗りながら云つて、飛び乗ると、今度は下りばかりで、赭土の道を砂煙をあげて疾走し出した。頬に涼しい風があたつて、よい気持だった。十分位走ると、海浜にある扇谷温泉の大きな看板の立つている県道に出た。

湯漕の中に身体を浸し、眼を瞑じた。久しぶりにのびのびした甚だ陶然たる気持であつた。一間四方位しかない狭い浴漕で、誰もいないので、彼は腕を伸ばしたり、ち

ぢめたり、掛声をかけたり、三勝半七酒屋の段を喰つたりした。腰硝子越しに芋畠があつて、大きな葉が揺いでいるのを見て、この辺の畠はどこの肥料を使つてゐるのだろうと思つた。彼は最近の事件を色々と回想し、まず、大体、幸福であつた。彼は手拭でごつしごつしと腕をみがき、首筋を洗つた。顔をつつこんで、沈んでみて、すぐあぶあぶと顔をあげ、いつか山の池に長いこと沈んでいた卯平を思い出し、あいつはまるで河童だ、どうしてあんなに長く水の中に居ることが出来るんだろうと不思議に思つた。彼はもう一ぺん鼻をつまみ、息を深く吸いこんで沈んでみた。すぐ苦しくなつて、あぶあぶと浮いた。どうしても駄目だと思い、断念して、また首を出したまま、窓から空を見た。汗を流して山道を登つた時はまだ夏だと思われるほどだつたが、こゝして窓から見ると、空はまことに深く、青く、まさに秋であった。彼がうつとりと空を見あげていると、かたんと音がし、横の潜戸が開いた。振りかえると、彦太郎はどきんとした。潜戸から美しい女の顔が出て、につこり笑つたからであった。女は微笑を湛えたまま、何かお支度をしておきましようか、と云つた。彦太郎は胸がどきどきするのに、我ながら驚きながら、何でも出来るのですか、と訊いた。何か咽喉に引っかかつたように声がかされるのを、これはいつたいどうしたことだと思い、汚ない身体を見せたくないために、首だけ出して云つた。何でも出来ます、と簡単に答えて

女は返事を待つた。何か肴をして、酒をつけておいて下さい、と彦太郎は女の顔をまじまじと見つめて云つた。承知しました、そこに浴衣を出しておきましたから、と答えて女は引っこみ、潜戸が軽く閉つた。彦太郎はふとためいきをつき、あれが卯平の話した女だなと思つた。なるほど、あれなら一苦労してみる氣にもなる男があるかも知れぬ、と昔の蕩児は往年を回想し、いつか十何年振りかで出合つた自分の女のことを思い出し、何度もためいきをついた。彼は叮嚀に顔をみがき、浴衣に着換えて、潜戸を開けると、すぐ前に階段があつたので、上つた。上ると眼の前にぱつとまつ青な海が開けて、さつと塩風が正面から火照つた顔に吹きつけて來た。部屋は四畳半のこじんまりした部屋で、床の間もあり、餉台の上には既に酒肴の支度が整えられてあつた。彦太郎が部屋に入ると、追いかけるように先刻の女がやつて來たが、薄化粧した女の姿は浮いたように美しかつた。彦太郎が坐ると、徳利を取りあげ、左の手で盃をさし、どうぞ、と女は云つた。盃を受け取り、一口にぐつと飲んだ。焼酎を飲みつけている彦太郎の咽喉には、日本酒は最初は水のようで困るのだが、いずれにしてもあまりよい酒ではないなと思つた。女が怪訝な顔をしたほど、彼は続けざまに盃を干した。最初は水のようであるが、少し飲み出すと、味が出て、急速に酔の廻るのが彦太郎の癖であつた。少年のように怖けていた彦太郎も酒のために勢が回復し、次第に平

常通りの彼に返つて來た。元氣をとりもどした彼は、いろいろとこの風呂のことなど聞き、冗談などもいえるほどゆつくりした氣分になつて來た。非常に情の溢れたよう見える一重瞼が何より美しかつた。細い眉毛は墨で引いたようにはつきり反つていた。顎をこころもち引きながらものをいうところは、どこか照葉に似ているなどと思ふ。彦太郎は酔の廻るにつれて、あやしげな氣持になつて行くのをどうするすることも出来なかつた。浴槽の中での幸福な氣持が、いつにない弛緩した心を誘い出したのかも知れない。あら、鯛網があがつたわ、と叫んで窓際には女は出て海の方を見たが、夕風におくられて、白粉の匂いがぶうんと彦太郎の鼻を打つた。風に吹かれてまくれた裾から赤いものがちらと視いた。もはや、彦太郎は、天魔に魅入られたごとく、邪念から逃れ去ることが出来なくなつたのである。女は、あら、徳利がないわ、と云つて出て行つた。いつの間にか十本から上の酒を矢継早に腹に入れていた。しきりと思ひ出される照葉の想念を追いやることなくしながら、くくれた顎の似ていることが、彼をけしかけるように彼の心意を攪乱した。いつか、夕暮れ時、便所の汲取口から見た女の身体が、眼の先にちらつき、既に充分酔の廻つた彦太郎は、囮を待つ猛獸のように待機したのである。彼は海に面した窓の障子を閉めた。やがて、階段に足音が聞え、徳利を持つた女が入つて來た。まあ、暑いのに障子を閉めて、と窓の方に行くのを、

いいんだよ、あんた、お坐り、と女の手を摑まえて引いた。あれ、酒がこぼれる、と女は徳利を摑んだが、引き寄せられるままに、彦太郎の横に坐った。女の身体の温みが、ぶつつかつた彦太郎の肩口から、ずんと身体中に沁みわたり、彦太郎は最早余裕を失つて、いきなり両手で女の肩を抱いた。すると、まるでバネに弾かれたように後につき飛ばされ、彦太郎は音を立てて尻餅をついた。逆上した彦太郎が起きなおつて近づこうとすると、女はすくと立ち上つて、あんた、衛生舎の小森さんでしょう、冗談はよした方がよいですよ、と云つて、襟をつくりながら、顎を引いて、艶然と笑つた。愕然とした彦太郎は、這いつくばつたまま、異様の惑乱に戸惑いながら、自分の名を呼んだ女を穴のあくほど見つめはじめた。凝視しているうちに、あッと彼は仰天するように絶叫し、さつと色青ざめ、見る間に酔も醒めはてて行くとがたがたと顛え出した。何という俺は迂闊だつたろう。何時か赤瀬の大将が何処やらの温泉に女を拵えているということを誰からか聞いたことがあつた、奥さんからは、近頃主人に女が出来ているということだが、何か聞いたことはないかと訊ねられたことがあつた、まさか町の近傍ではなく、よく旅行する赤瀬の大将のことだから、遠方の温泉地かと思つて居つた、ああ、この女だつたのだ、この女だ、そう悟ると、彦太郎はまるで死刑の判決でも受けたように立ち竦んだ。突然、彼は決然たる眸をあげ、おせいを見つ

めると、そこへびたりと両手をついた。ああ、私が悪うございました、どうぞ、赤瀬の大将には秘密にお願いいたします、酒癖が悪いため、とんだ粗相をしました、どうぞ、どうぞ、お許し願います。そう云つて、ぺこぺこと頭を下げた。立つて居つたおせいもそこへ坐つた。なにこれから気をつけたらいいんですよ、と仕方なさそうに答えた。どうぞ、何卒、大将にはおっしゃらないで下さい、お願ひです、と何度も同じことを繰り返し、蓑口から十円紙幣を三枚出して餉台の上に置き、立ち上り、悄然として出て行つた。階段の中途から、また引っ返して来て、どうぞ、間違いなく秘密に頼みます、と念を押し、下りて行つた。彼は浴衣を脱いで仕事着に着換えると、自転車で夕暮れの海浜に出たが、どうも気になるので又引っ返して行つた。おせいの姿が見えないので、あちこち探していると、電話をかける声があるので、どきんとし、近寄つて耳をすましてみたが、それは赤瀬氏のところへではなく、町の酒店へ酒を註文しているのであつた。電話を切つてこちらへ来るおせいに、さつきはどうもすみませんでした、なんにも知らないものだから、御無礼しました、一生のお願いですから、大将には内密に、と云いかけるのを、しつこいわね、一度聞いたら判つていますよ、前から大将からあんたのことは聞いて居つたし、こんなこと大将に云つたら、いつぺんであんたの仕事はおじやんでしょうから、そんな気の毒なことはしませんよ、と吐

いて捨てるよう云つて、おせいは台所の方へ行つてしまつた。見えなくなつてから、彦太郎はその好意が嬉しく、ありがとうございます、と云つて、心から町噂に台所の方にお辞儀をした。それから悄然と足を返し、自転車にまたがり、夕暮れの道を帰つて行つた。

或る日、仕事を終えて久し振りに活動写真でも見に行こうと思い、框に腰を下して、残りの焼酎をちびりちびりと飲んでいると、小森さん、と女の声がした。表に出ると日の暮れかけた夕闇の中に、角の諸式屋のおかみさんが立つていて、お電話ですよう、と叫んだ。へえ、ありがとう、と答えて走つて行つた。受話器を取ると、ああ、小森君？と聞きなれた阿部の声がし、忙しいかね、何をして居るかね、いま自動車をやつたから乗つて來たまえ、と云つて、こちらから話しかけようとすると、そのまま電話は切れてしまつた。何事だろうと思つて店の敷居をまたごうとした時、また、電話のベルがけたたましく鳴り、彦太郎が受話器を取つて耳にあてると、小森君？とまた阿部の声がし、云い忘れたが、来るとき、実印を忘れんように、と云つたまま、また、切れてしまつた。変だなあと思い、トラック小屋に帰つて来ると、タクシーが待つていて、小森さんでしようと運転手が訊いた。要領を得なかつたが、実印をポケットに入れ、自動車に乗つた。阿部の家に行くものと思つていると、方角違ひの方へ走

るので、ますます不思議に思つてゐると、自動車は、いつか行つた料亭千成の前で止まつた。案内をされて入つて行くと、何時かの部屋に、正面に阿部がまつ赤な顔をして胡坐をかき、両側にいつかの女と仲居とが居た。やあ、待つてました、さあさあ、こちらへ、と呂律もあやしい口調で、女ども、酒をどんどんはこべ、と阿部は自分の前のコップをとり、さあ、大きいので行こう、と彦太郎の眼の前につき出した。受けると、自分で徳利を取つて、こぼこぼといっぱい注いだ。もとより後に引かぬ彦太郎は、にやにやと笑い、コップに口をつけると、ごくんごくんと一息に飲み干した。見事、見事、とふざけたように扇をあげ、賜わろうにも日本号の檜がない、とあたりを見廻したが、ああ、よいものがあつた、この女子をやろう、と芸者の肩を摑み、小森殿は女子が好きじや、どうじや、それとも、照葉にくらべると駄目かな、と云つてけたたましい声を立てて笑つた。女子好きじやといわれた刹那、彦太郎はどきんとした。いつかの扇谷温泉の一件を阿部が知つていての皮肉かと思つたのだ。然し、そうでないことがわかると、彼はほつとした。冗談でしよう、あんた、と彦太郎は苦笑し、コップを阿部にさした。お流れ頂戴、とコップを押しいただき、女に酌をさせたが、三分の一も入らぬうちに、コップをあげた。それから乱れた調子で盃が回転したが、彦太郎も醉が廻つて來た。しばらくすると、ああ、大事なこと忘れていた、と、やつと

思い出したように、阿部が、女どもは一寸遠慮しといてくれ、と云つた。なに？内緒話？と芸者は不服そうに、仲居を促して出て行つた。小森君、実は、大事な話なんだが、と先刻の醉態はなく、素面のような調子で、声を細め、実印を持って来てくれたか、と訊いた。へえ、持つて来ました、と答えると、実は、いよいよ先達来から問題になつていた糞尿汲取事業が市営となる時期が切迫して來た、先般の歎願書問題以来、俄然、輿論が沸騰して來たために、市当局としてこれを市営に統制せざるを得ない機運に向いて來た、そうとなれば、いよいよ、買収ということになる訳だ、そこで、今度は我々の問題だが、いよいよ買収となれば、その権利といふものを確然としておかなければならん、その意味で衛生舎はその権利を是非公正を踏んで決定しておく必要がある、そこで従来の経緯や経済関係を種々考慮し、いろいろと研究の結果、ここに公正証書を作製した、市営買収の件は明日にも決定実施の情勢にあるので、早速、公正を踏まねばならん、赤瀬氏とも相談し、意見も一致したのだから、これに捺印して貰いたいのだ。阿部はそう云つて、懐から部厚な書類を取り出した。彦太郎は話を聞きながら、わくわくと胸の高鳴るのを覚え、へえ、いろいろとお世話様でございます、こういう書類のことなどは一向わかりませんから、よろしくお願ひいたします、と云つて、ポケットから黒い皮のサックを出して、阿部の方に押しやつた。阿部はそれを

取ると、印形を出し、ぱらぱらとあちらこちらの書類をめくりながら、幾つも印をついた。彦太郎はいよいよ多年の宿望の実現される日の近づいたことをはつきりと感じ、鼻のあたりがつうんとし、涙のにじみ出て来るのを抑えることが出来なかつた。彼は印をつく阿部の頑丈な手元を無限の感謝と信頼とをこめて眺めた。印をつき終ると、サックに入れて、無造作のごとく書類を彦太郎の方に押しやつた。後で面倒になつてもいかんから、一ぺん見といてくれたまえ、と阿部が云うので、手に取つてめくつて見たが、赤瀬氏や阿部の名と並んで自分の名のあるのが判るだけで、難しい法律的な文章はなんのことやら判らなかつた。機嫌を伺うように、判りませんから、と返すと、阿部は、ゆっくりと落ちついた口調で、それでは僕が簡単に内容を話しておこう、この公正証書はつまり、買収された場合の我々の権利の分割に対する決定であつて、それは、先刻も話した通り、諸種の事情を考慮研究して、赤瀬春吉五割、阿部丑之助二割五分、小森彦太郎二割五分、ということになつてゐるのだ、つまり、と云いかけるのに、一寸待つて下さい、今いわれた何割何分というのはなんのことですか、と彦太郎は、慌てて聞いた。権利の分配率さ、つまりこれがいくらで買収になるか、それは今後の決定に俟たなければ仕方がないが、その定まつた金額の何割ということになるのだ、即ち、赤瀬春吉五割、阿部丑之助二割五分、小森彦太郎二割五分、と云いかけ

るのを、彦太郎は次第にその意味を理解し始め、つまり、十の権利とすれば赤瀬の大将が五つで、あなたが二つ半で、私が二つ半、というのですか、と彦太郎はせきこんで聞いた。そうだよ、と阿部は平然として答えた。彦太郎はようやく一切の事情を諒解し、次第に酔も醒め、色青ざめて来ると、膝頭ががくがくと顫えだした。その様子を見てとり、阿部は声を和げて、君は腑に落ちん様子と見えた、君の考えはよくわかった、事業の名義人であり、最初から事業にたずさわって居たのは君だから、君が大半の権利を得るのが当然と考えるのだろう、それは一応はもつともと思える、然しそく考えてみたまえ、なるほど、最初は君の事業であつたに違いない、ところが君は金銭上のためにトラックを抵当にした、それを受け出すことが出来なかつたならば、君の事業はその時停止したことになるのだ、それを赤瀬氏の経済的援助に依つて再び事業を始めることが出来た、しかも経済的には全く力を失つて居つた君は、其後も屢々赤瀬氏の出資を請い、ようやく今日までやつて來た、市の指定となつたことも赤瀬氏あつたればこそである、その後、僕が衛生舎の片棒をかつぐことになつた、僕の出資も相当の額に上つてゐる、従来の経緯並びに経済上の関係等を考慮し、研究の結果は、また法律的にも、この割合はもつとも妥当である筈だ、内容的にも法的にも既に赤瀬氏の事業と称するも過言ではないのであるから、赤瀬氏の半分権利は当然のことと思

う、と阿部は静かな抑えつけるような口調で云つた。聞いて居るうちに彦太郎は何か放心したような状態になり、身体が宙に浮いているような感じがした。君は不足のような様子であるが、よく考えてくれたまえ、僕は何も君の事業の権利を横合いから奪うとかどうとかいう意味ではない当然の根拠に基いて、当然の立案をしただけだ、しかし君を殺することは出来ない、また君と争うことも出来ない、不服であれば保留してもよいのだから、よく考えておいてくれたまえ、さあ、話はそれ位でよからう、飲みなおしだ、またひとつ、君の実感のこもつた猥談でも聞こうじやないか、と阿部は急に燥いだ調子になつて、書類を懐に入れ、手を叩いた。はあいと遠くで女の声がした。彦太郎の眼からはらはらと大粒の涙が流れ落ちた。彼はそれを拭く気力も抜け果てた様子で、いろいろお世話になりました、いずれ返事しますから、私はこれで失礼します。そう云つて立ち上つたがよろよろとよろけた。女が入つて来て、もうお帰りと云つたが、そのまま力のない足どりで階段を下り、夜の町へ出て行つた。

蹠蹠とした足どりで彼が町を歩いていると、後からいきなり肩を叩いたものがあつた。驚いて振りかえると、ふうと熟柿くさい息が吹きかかり、やあ、衛生舎社長どの、いかがでござる、と云いながら一人の男が、ぶつかるように彼になだれかかつた。衛生課長杉山氏であつた。呂律も廻らぬほど銘釘し、彼の腕を摑んで、というより腕に

ぶら下るようにして、しょぼしょぼの眼を細め、さあ、今夜は大いに飲もう、と彦太郎をぐんぐん引き摺り、横町に入りこんで、劇場の方に来ると、おでん屋弥次郎兵衛に入りこんだ。引き摺られながら、先刻から茫然として居つた彦太郎は、次第に棄鉢な気持になりはじめ、今夜は無茶苦茶に飲んでぐでぐでに泥酔したいと思つた。女、酒々、と杉山氏はネクタイの解けたのをだらりと下げて、べたんと腰を下し、人生酒あるかなじや、さあ、社長殿、と錫かんをつけた。これが何時も市役所で難しい顔をしてがみつけた人であろうかと、彦太郎は妙な気持がしたが、杉山氏は眼鏡の下から細い眼をぱちぱちさせ、小森君、いつも喧しいことばかり云つていたこと、悪く思うてくれるな、職務はつらい、それにどうも政黨がうるさい、こんな馬鹿なことがあるか、栄誉ある市庁の役人が、政黨にどうして気兼ねせねばならんのか、然し皆戦がこわいのだ、然し、もう僕は恐れんぞ、この間の歎願書問題でも、一途に、俺のやり方が悪いと云う、衛生課長を更迭しろ、と或る者は云つてゐるそうだ。馬鹿にするな、ああ、小森君、握手しよう、可哀そうなのは人民だ、人民こそ純真無垢にして偽わらざるものだ、と杉山氏は急にはらはらと落涙した。醒めかけていた醉が急にぶり返して來た彦太郎は、杉山氏の肩を兄貴のようにたたき、課長さん、よくわかります、あなたの気持はよくわかります、と、何がわかつたのか、しきりに領き、しつかり握

手して搖つた。よし、乾杯しよう、人民の敵を討伐せないかん、世の中が間違つて居る、と杉山氏は絶叫しておいおい泣きだした。彦太郎も興奮し、人民の敵という言葉が、わからぬながら、共感を覚え、この間からの色々な事件が走馬燈のように脳裡に去來した。二人が抱き合うようにして酒を酌み交していると、いきなり一人の肩を誰かが叩いた。杉山氏は泥酔して覚えず、しきりとぶつぶつ云つては酒をのんでいたが、彦太郎が顔を上げると、これも既に相当泥酔しているらしい猿のような天野久太郎であつた。久太郎は眼をきょろきょろさせ、こ、こ、こ、小森さん、す、す、すまんこうした、わ、わ、わしも、だ、だ、だまされた、と巧く云えないので歯がゆそうに身体を振り、そのために余計吃つて、この妙な男も、眼に涙をためているようであつた。彦太郎が啞然として見つめると、吃りながら云う意味は、つまり、汲取人組合の結成を妨害するために友田が天野を買収し、 トラックを買う資金を出してやるから、と云つて、騙したらしいのであつた。この奇妙な三人の泣き男たちは、肩を組み、腕を叩き、盃を交わし、この愚劣なる光景を他の客達が指さし嘲笑していることにも気づかぬ風で、いつ果てるとも知れぬ饗宴をつづけるのであつた。

すっかり秋風が立ち初めて、日の光も和らぎ、蜩も鳴かず、夜は、数々の虫ばかり騒々しい頃となつた。事業に対する限りない執着のため、今は脱殻のごとく彦太郎は、

疾走するトラックの運転手台に坐っていた。沢田は口を尖らせ、いろいろと慰め顔に云つていたが、彦太郎が、うん、とか、いや、とか、はかばかしく返事をしないので氣まずい顔でハンドルを握つていた。先夜、阿部から示された公正証書は決定的のものではなく、彦太郎の再考によつて訂正するように云われていたが、既に捺印ずみになつて居つて、何時の間にか公証役場に提出されていた。彦太郎は抗弁する方法を知らず、またその気力も失せてしまつた形であった。赤瀬春吉は阿部の作製した公正証書を見て、五割も自分名義にするのは少しひどすぎるではないかと一口云つたけれども、阿部が一流の弁舌で滔々と説明を始めると、面倒くさそうに口をつぐみ、家内が印を持つてゐるからと、うるさそうに出て行つてしまつた。赤瀬の奥さんは阿部の処置に対して、ひどく不機嫌で、それはあんまりではないかな、なんば後になつては金に困つて潰れそうになつて居つたとはいえ、もともとは小森が始めた仕事であるし、家屋敷はもとより、田地田畠まで無くし、一生を棒に振つてかじりついて來た畢生の事業である、いくら、こちらで金を出してやつたからと云つて、御本尊の小森に二割五分というのはいけない、なんば少くとも半分の権利をやらねば可哀そだ、こんなことになれば、最初トラックが抵当に入つてゐるのを氣の毒に思つて、少しばかりの金を貸してやつたわたしの立場が無くなるではないか、あんまりとは思わないかな、

と、赤瀬にも、殊に、顔を見る度に阿部に云つた。阿部は初めは色々と弁解し説明もしてみるのだが、いくら口を酸っぱくして述べ立てても納得せず、あんまりではないかなばかりを繰り返す奥さんにしまいには根気まけして、近頃では赤瀬の家にも滅多に寄りつかなくなつた。結果に於てはこうして阿部の案が法律的にも効果を持つた形になつた。一生をこの事業のために費やし、あらゆる苦難とたたかい、ひたすら事業に拘泥するばかりに侮辱に耐え、迫害にも身を曝らして來たが、最近の諸種の事件のさ中にまき込まれ、いつたい何が何であるか見当もつかなくなり、茫漠とした孤独感のみがひたひたと胸をひたした。悲しみも喜びも忘却した空虚な気持であつた。いつかの晩、お互だといいながら肩を叩いて酒をのんだ市役所の杉山課長を、何かしら味方に得たような気持であつたが、あの翌日、市役所に行き、杉山さん、昨夜は失礼しましたな、というと、杉山氏は眼をしょぼつかせ、腑に落ちぬ様子で、なにが?と聞き返し、一向なんにも覚えていない様子で、相かわらず、がみがみと喧しく云うのであつた。がつかりして、悄然と市役所を出たのであつた。今、トラックに揺られながら、彦太郎は鉛豆煙管を噛み、深い秋に見いっていた。トラックの方には人夫が一人乗っている。二十荷の桶がぶつかり、たぼたぼと鳴る。ぎぎぎと軋み、トラックが急停車したので、前の板で大方額を打つところであった。トラックは唐人川尻の

土橋の畔に止まつていた。沢田がよいしょと掛声をかけて飛び下りた。小森も鉈豆煙管を腰にさし、つづいて下りた。唐人川尻の壺に糞尿を棄てに来たのだ。億劫そうに李聖学が長髪をひねりながらのろくさい様子で箱から下り、箱の蓋を取つた。トラックの横にくくりつけた小さいリヤカアを外し、三人は協力して桶を下した。それを四荷リヤカアに積み、李聖学が引いて、小森が後を押した。ところが、ここに意外なる出来事が起つた。二人がリヤカアを押して糞壺のところまで来ると、その糞壺の傍に伴天を着た男が七八人居て、色の黒い背の低いのが、走り出て来て、ものものしい様子で李聖学の前に立ち塞がつた。李聖学がびっくりして、とうしたのですか、といて下さい、と云うと、小男とは思われぬ銅鑼声で、喧しいわい、貴様達こそ帰りやがれ、今日から絶対にここに糞を棄てさせぬのだ、と喚き、リヤカアの握りに手をかけて、ぐいぐいと押し返した。糞壺の縁に居つた男達もわいわいと声を立て、立ち上つてこちらに襲いかかる氣勢を示した。伴天の男達はスコップで糞尿壺を埋めていたらしかつた。小森はリヤカアの後から前の方に出て、どうしたんですかな、あんた、と少しだどおどおどしながら訊いた。どうしたかとは何か、聞かにやわからんか、大馬鹿野郎、と先刻の髪だらけの背の低い男が、肩を怒らして云つた。彦太郎は、声を和らげ、おどおどと、ここ糞壺は市役所の承認を得て使用しているのであつて、間もなく市の浄化

装置が出来ることになつてゐるし、それまでということで使用しているのだ、あんた達はどういう訳で邪魔するのですか、と逃げ腰で訊いた。どういう訳も糞もあるか、氣の利いたことをいうな、ともう喧嘩腰で、その男は威嚇するようにスコップを振りあげた。怖けづいた李聖学と沢田は後ずさりし始めた。彦太郎がふと唐人川尻の土橋を見ると、土橋の畔に、皆田老人が立つていて、その横にひとりの少年が、ちょこんと蹲んでいるのが見えた。見たような子供だと思ったが、すぐいつかトラックにいたずら書して逃げた少年だと気づいた。すべての事情を彼が諒解したように思つてゐるうちに、勢づいた伴天男達は、糞壺の縁に立つていた一番背の高いのが、スコップを土の中につつこんだかと思うと、これでも喰えと叫んで、ぱつと土を跳ねあげた。土は黒い雪のごとく中天に舞いあがり、ぱらぱらと彦太郎の頭上に降つて來た。帽子の上に石塊が飛んで来て、庇を跳ねた。砂粒が顔にかかる來たので、彦太郎はうつむいて眼を瞑した。一人がそうすると、外の伴天男も同じように土を跳ね、泥の礫を飛ばしはじめた。吹雪のように飛びかかつて來る土の下にいた彦太郎は、次第に湧き上がつて來る憤怒に、ぶるぶると顫え出し、土の礫を避けて身體を踞めていたが、大きな石塊がどさりと彼の肩にあたると、突然すくつと身體を起し、胸を張つて、正面の敵に向つて毅然としてつ立つた。彼の顔面に見る見るはげしい憤怒の色がまつ赤に

溢れ出て、ぶるぶると痙攣したようにはげしく顫え出したが、貴様たち、何をするか、と咽喉を裂いたように絶叫した。彼はいきなり、リヤカアに積んであつた桶を力まかせに突いた。桶はリヤカアから転げ落ち、落ちた桶から、ごほんと音がして、こえびしゃく黄色い汁が飛び、糞尿が桶の口から流れ出した。リヤカアの横にさしてあつた長い糞尿柄杓を抜くと、彦太郎は啞然として見ている男達の中に、貴様たち、貴様たち、と連呼しながら、それを振りまわして躍りこんだ。そのはげしい気魄に気を呑まれた伴天男達が両方に喚声をあげて散った。李聖学も、沢田も、思いがけぬ彦太郎の態度を茫然として見つめるばかりであった。彦太郎は糞壺の縁まで来ると、半分に埋められたが残りの半分に満々と湛えている糞壺の中に長い柄杓をさしこみ、これでも食えと、絶叫して、汲み上げると、ぱつと伴天男達へ振り撒いた。わっと男達は声をあげ、左肩から浴せられた先刻の背の低い男が、逃げようとしてそこへ仰向けに引っくり返った。

貴様たち、貴様たち、と彦太郎はなおも連呼し、狂気のごとく、柄杓を壺につけては糞尿を撒き散らした。伴天男達はばらばらとわれ先に逃げ出した。柄杓から飛び出す糞尿は敵を追い払うとともに、彦太郎の頭上から雨のごとく散乱した。自分の身体を塗りながら、ものともせず、彦太郎は次第に湧き上つて来る勝利の気魄に打たれ、憑かれたるもののごとく、糞尿に濡れた唇を動かして絶叫し出した。貴様たち、貴様た

ち、負けはしないぞ、もう負けはしないぞ、誰でも彼でも恐ろしいことはないぞ、俺は今までどうしてあんなに弱虫で卑屈だったのか、誰でも来い、誰でも来い。彦太郎は初めて知った自分の力に対する信頼のため、次第に胸のふくれ上つて来るのを感じた。誰でも来い、もう負けはしないぞ、寄つてたかって俺を馬鹿扱いにした奴ども、もう俺は弱虫ではないぞ、馬鹿ではないぞ、ああ、俺は馬鹿であるものか、寿限無寿限無五光摺りきれず海砂利水魚水魚末雲來末風來末食來寝るところに住むところや油小路藪小路ぱいぽぱいぽばいぽのしゅうりん丸しゅうりん丸のぐうりんだいのほんぼこびいほんぼこの長久命の長助、寿限無寿限無五光摺りきれず海砂利水魚水魚末雲來末風來末食來寝るところに住むところや油小路藪小路ぱいぽばいぽばいぽのしゅうりん丸しゅうりん丸のぐうりんだいのほんぼこびいほんぼこの長久命の長助、さあ、誰でも来い、負けるもんか、と、憤怒の形相ものすごく、彦太郎がさんさんと降り来る糞尿の中にすつくと立ちはだかり、昂然と絶叫するさまは、ここに彦太郎は恰も一匹の黄金の鬼と化したごとくであつた。折から、佐原山の松林の蔭に没しあじめた夕陽が、赤い光をま横からさしかけ、つつ立つてゐる彦太郎の姿は、燦然と光り輝いた。

火野葦平 明治39年（1906）～昭和35年（1960）

本名玉井勝則。若松の石炭仲仕業の家に生まれる。早稲田大学中退。旧制小倉中学校在学時から投稿を始め、昭和13年、中国戦線従軍中「糞尿譚」で第6回芥川賞を受賞。その後「麦と兵隊」などの「兵隊三部作」で一躍流行作家となる。戦後は一時公職追放されたが、「花と龍」「革命前後」など精力的な創作活動を続けた。「九州文學」の中心的存在であった。自宅「河伯洞」で自殺。芸術院賞受賞。

火野葦平選集（昭和32年5月／東京創元社）を底本とした。
適宜、新漢字、現代仮名使いに改めた。

表記について

本書には現在の観点からすれば、差別等にかかる不適切な表現がありますが、本書の背景となる時代性、および著者が故人であることを考慮してそのままとしました。

(北九州市立文学館)

北九州市立文学館文庫(1)
平成18年11月1日第1刷発行
平成22年1月24日第2刷発行
著者 火野葦平
岩下俊作
劉寒吉
発行 北九州市立文学館
〒803-0813 北九州市小倉北区城内4-1
Tel (093)571-1505
Fax (093)571-1525
印刷 株式会社ゼンリンプリンテックス

北九州市立文学館文庫 ◇

